J. Rakuno Gakuen Univ., **29** (1) : 1～27 (2004)

複式簿記の考古学(3)*

日　野　晃　輔**

The Archaeology of Double Entry Book-keeping (3)

Kousuke HINO
(May 2004)

第 4 章　活版印刷の普及と複式簿記

一昨年カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授のマイケル・マン（Michael Mann）の壮大な歴史書「ソーシャルパワー：社会的な〈力〉の世界歴史Ⅰ」[1]の訳書が上梓され，各紙書評欄を賑わせた。この中でマンは〈力〉が発揮する諸能力を決定的に高めた社会的発明工夫のリストとして

(1)　動物の飼養，農耕，青銅冶金術 ── 先史時代
(2)　灌漑，円筒印章，国家 ── 紀元前 3000 年頃
(3)　筆記体の楔形文字, 軍事兵站部, 強制労働 ── 紀元前 2500－2000 年
(4)　筆記された法典，アルファベット，スポーク付きの車輪の固定車軸への取り付け ── 紀元前 2000－1500 年
(5)　鉄の精錬，貨幣の鋳造，軍船の建造 ── 紀元前 1000－600 年頃
(6)　重装歩兵と密集方陣，ポリス，読み書き能力の伝播，階級意識と階級闘争 ── 紀元前 700－300 年
(7)　マリウスの竿を装備した軍団，救済宗教 ── 紀元前 200－西暦 200 年頃
(8)　湿潤土壌の犂耕，重装備兵と城砦 ── 西暦 600－1200 年頃
(9)　調整的・領域的な国家，大洋航海，印刷術，軍事革命，商品生産 ── 西暦 1200－1600 年

をあげているが,[2] さらに(9)については「フランシス･ベーコンは 16 世紀の著作で，三つの発明が「世界中のありさまと状態とを変えた」と言った ── つまり火薬と，印刷術と，羅針盤である。……たぶんこれらのすべてが，もともとは東方に発したものだったが,〈力〉の世界歴史へのヨーロッパの貢献は，それらを発明したことではなく，広く伝播させたことだったのである。……これらの離陸期の年代がたまたま 1450－1500 年に集中していることは,瞠目に値する。台頭しつつあったヨーロッパ社会の二つの主要な〈力〉の構造，すなわち資本主義と国民国家とにこれらがリンクしていることも，瞠目に値する。」[3] とも述べている。

後述する活版印刷の発明・普及を歴史的にどうとらえるかについては，さまざまな立場がある。例えば，アナール学派の人々はどうであろうか。その創始者たるリュシアン・フェーブル（Lucien Febre）は名著「書物の出現」[4] を著しているし，最近ではシャルチェ（Roger Chartier）が「読書の文化史」[5]，「書物の秩序」[6] など書物の歴史に関する諸著作を公表している。フェルナン・ブローデル（Fernand Braudel）も「大砲･印刷･外洋航海が，15 世紀から 18 世紀にかけての三大技術革命であった。」[7] としており，その位置づけは明らかであろう。

1　マイケル･マン，森本醇･君塚直隆訳「ソーシャル･パワー：社会的な〈力〉の世界歴史Ⅰ」2002 年 NTT 出版
2　「ソーシャル・パワー」567 頁
3　「ソーシャル・パワー」484 頁
4　リュシアン・フェーブル，アンリ＝ジャン・マルタン，関根素子ほか訳「書物の出現上・下」1998 年ちくま学芸文庫
5　2001 年，新曜社
6　英訳版 〝The Order of Books〟 1994 年 Stanford University Press
7　フェルナン･ブローデル, 村上光彦訳「日常性の構造 2」1985 年みすず書房 72 頁

* 本論は全体が 5 章よりなる「複式簿記の考古学」の第 4 章であり，第 1 章簿記書にみるエピステーメ，第 2 章資本勘定の誕生と資本主義の精神は「環境システム学部論集 3」に，第 3 章アラビア数字の普及と複式簿記は「紀要第 28 巻」に掲載した。第 5 章公証人制度と複式簿記は後日機会をみて公表の予定である。

**環境システム学部経営環境学科，簿記・会計学研究室
Department of Business Environment Studies, Book-keeping & Accounting, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

「アナル派以後,書物論あるいは書物史はまったく変わった。書物の歴史は，アナル派的な意味でのひろい社会文明史のなかから，書物というものに注目するときに切りとられた領域の歴史的叙述となる。より詳しく言えば，書物という物体の生産と流通と消費の社会史,――つまり1,書物はどのような人びとにより，どのような方法で，どのような読者を目標に，どのような物体としてつくられたか，2，どのような人びとにより，どのようなかたちで，どのような社会階層をめざして流布されたか，3，どのような階層の人びとにより，どのようなかたちで読まれたか，――こうした問題を歴史的に追いながら総合的に探る試みとなったのである。」[8]

またメディア理論におけるトロント・スクール[9]と呼ばれる一連のカナダの諸学者（マーシャル・マクルーハン　Marshall Mcluhan，ウオルター・オング　Walter Ong,ダヴィド・オルソン　David Olson など）により書籍文化に関する諸研究も数多く出版されている。

もちろん書物の歴史については，本論でも参照したアイゼンスタイン（E.L. Eisenstein），スタインバーグ（S.H. Steinberg），リチャードソン（Brian Richardson），カーター（Harry Carter），ヴューラー（Curt F. Buhler），オズワルド（John Clyde Oswald），マクマートリー（Douglas C. Mcmurtrie）など本家筋の書誌学的観点に立った研究は，それこそ数限りなく存在することは言うまでもない。これらの書誌学者の中には，マッケンジー（D.F. Mckenzie），フィシュ（Stanley Fish），グラフトン（Anthony Grafton）などテクストの社会学（Sociology of Texts）という視点からの研究者もいる。

1999年11月28日の *Sunday Times* が読者の投票により ‘man of the millennium’ としてグーテンベルグ（Johann Gutenberg）を選んだ[10]ことに示されているように，印刷術のもつ歴史的意義についてはあらためて詳説するまでもないであろう。

かってルイス・マンフォード（Lewis Mumford）はその著〝Technics and Civilization〟[11]の巻末（438頁以降）に10世紀以後の「発明年表」をのせたが，その中にはボローニア大学（1100年），遠近法（1440年），近代印刷術（1440－1460年），工業博覧会（1569年）など彼のいう社会的発明の項目が，蒸気機関，エレベーターなど機械的発明と並んでのせられている。この著作では，複式簿記もアラビア式記数法も「量的思考と抽象化」という同一の視座から捉えられているのである。マンフォードの技術観は「技術の変化というものは，まず人間の観念のなかで，願望や夢，目標などの変化として起こり，やがてこれが一つの技術として具体的なかたちを取るや，今度は逆にこの技術そのものが人間の観念を変えていく。肝心なことは，まず，人間の観念のドラマが出発点であるということである。」[12]

以下の論述は，このような技術史観に立ちながら第3章までの複式簿記，インド＝アラビア式記数法同様，M・ウエーバー（Max Weber）の諸著作に一貫して流れる資本主義成立の長期にわたる「合理化過程」の一連の流れの中で印刷術の普及と複式簿記の関連を理解しようとするものである。ただし，ウエーバーが合理化の問題を経済や国家という行為システムのそれとして捉えているのに対し，本論はどちらかと言えばハーバーマス（Jurgen Habermas）のように意識と日常的実践の場である「生活世界」の合理化，生活形式を貫く構造基盤（インフラストラクチャー）として捉えようとする立場にたっている。またそのような視点から，上述したさまざまな研究分野から複式簿記の成立・普及に関係する事項を抽出・整理した，いわば研究ノートに留まっている。筆者の目指す複式簿記の成立・普及の社会的背景についてのより総合的研究への一段階として，お読みいただく方々のご寛容をお願いする次第である。

マンハイム（Karl Mannheim）の「イデオロギーとユートピア」は基本的には科学的政治学の存立要件についての論述であるが，その基本概念を借用するならば，このような合理化過程が在来の身分的――封建的社会秩序，教会的――神学的世界像を変形させるような作用をもった新興市民階層のユートピア形成の背景としてその一翼を担った時代であり，その後これら新興の諸勢力と絶対王政の結合により時代の，そして支配階層のイデオロギーとして成熟化していくまでの，その期間が対象である。「合理化されるもの，合理的に支配されうるものの領域がますます増大し，それに応じて非合理的な活動領

8 清水徹「書物について」2002年岩波書店5頁
9 A. Briggs & P. Burke: A Social History of the Media, From Gutenberg to the Internet, 2002年, Polity Press, 12頁
10 同著6頁
11 L. Mumford: Technics and Civilization, 1934年, Harcourt, Brace & World, Inc. 1963年版。による
12 木原武一「ルイス・マンフォード」1984年　鹿島出版会39頁

域はますます狭められてゆく」[13] 時代であり，その行き着く先は，「量化，形式化，体系化が確固たる公理になる」[14] 近代的意識である。

簿記･会計学が，サブシステム（ハーバーマス「イデオロギーとしての技術と科学」）としてではあるが，はたしてミネルヴァのふくろうのように夕闇とともに現実の世界を事後的に把握する理論（ヘーゲル「法哲学」）なのか，ユートピアとして時代精神を先取りし歴史の行き先を理論的に予測するものなのか，それともこう言った次元とは全く別に，実践世界における一つのハビトォス（ブルデュ　Pierre Bourdieu「実践感覚」）として，経験をモデルとして組織的，技術的な現実支配に基づいて方向づけられたものなのか，昨今における会計ビッグバンの時代的意味を含め，それを判断する力は筆者にはない。しかし少なくとも複式簿記が，その誕生・成長の初期段階で，現代世界成立の構造的要因の一つである近代合理性（目的追及的・道具的理性あるいは計算的理性）形成の一翼を担ったのではないか，というのが本論の一貫する問題意識である。

そして本章の展開の場について付言するならば，まさしくマイケル・マンのいう「封建制ヨーロッパ本来のダイナミズムが拡大包括性を増すにつれて，資本主義と国民国家とはゆるやかな，しかし協調的で一点集中的な同盟を形成し，それがまもなく天上と地上の両方を征服することとなった」[15] 時代であり，一見多元的には見えてもＩ・ウォーラーステイン（Immanuel Wallerstein）の「ヨーロッパ世界経済」[16] の成立期に当たり，単一の世界帝国や「世界経済」は成立していないが，キリスト教という共通のアイデンティティーが存在したヨーロッパがその舞台なのである。

この時代フランス（リヨン）で「ガルガンチュア物語」や「パンタグリュエル物語」を書いたフランソア･ラブレー（Francois Rabelais）の作中人物（パンタグリュエルの父）にこの時代の雰囲気を語ってもらおう。

「今や一切の学問は復旧せしめられ，諸々の言語研究も再興せしめられ候。即ち，ギリシャ語。これを知らずして自ら学者と名乗るは恥辱にござ候。またヘブライ語，カルデヤ語，ラテン語に候。世にも優雅にして端正なる印刷術も，拙者の治世下において天与の霊感によりて発明いたされたるものに候が，これに対して，一切の兵火の器具は悪魔の教唆によりて創められたものに候。学識豊かなる人々，世にも博学なる師匠，宏壮なる書院，満天下に満ち溢れ居り，プラトン，キケロ，パピニヤヌスの時代と雖も，現時見られるがごとき勉学の便はなかりしならむと愚考仕り候。」[17]

Ｉ　ヨーロッパにおける活字印刷の発明と普及

印刷術一般について論ずるならば，中国では 9 世紀から，日本でも 11 世紀には仏典の印刷がすでに行われている。しかしこれらの印刷は，木版あるいは陶製の活字によるものであり，15 世紀前半に中国あるいは朝鮮で金属活字が使用されているが，その普及はごく限られている。

「科学技術は，それまでの技術への精通を前提として前進する。……科学技術の進展過程が自己触媒的であるもう一つの理由は，新しい技術や材料が登場することによって，新旧のものの組み合わせで別の新しい技術が可能になる，ということがある。たとえば印刷技術は，グーテンベルグが聖書を印刷した 1455 年以降，爆発的に普及している。……中世の印刷工は，紙，可動式活字，冶金術，印刷機，インク，文字という六つの技術を組み合わせて使うことができた。グーテンベルグは，活字の不統一による致命的な問題を克服するために，鋳造活字を用いた活版印刷術を考案したが，彼が鋳造活字を作製できた裏には冶金技術の発達があった。彼は，鋳造活字の母型を作製するために必要な鉄鋼を入手することができた。真鍮や青銅合金を使って鋳型を作ることができた。鉛と亜鉛を主材とする活字合金によって活字を鋳造しやすくなった。当時のブドウやオリーブの絞り機からヒントを得て，ハンドルの回転をネジの上下運動に連動させるプレス印刷機を作ることができた。既存のインクに，油を加えて改良したインクを使うことができた。3000 年かかって進歩したアルファベット文字のおかげで，中国語のように何千種類もの活字でなく，数十種類の活字を鋳造するだけで済んだ。」[18]

「模倣であろうと再発明であろうと，ヨーロッパの印刷術は苦難を経ながら，1440 年―1450 年ごろ，あいつぐ手直しを重ねつつ根をおろした。」[19]

13　マンハイム「イデオロギーとユートピア」中公バックス世界の名著第 68 巻 307 頁
14　同著 281 頁
15　「ソーシャル・パワー」485 頁
16　「近代世界システムＩ」1981 年　岩波現代選書
17　ラブレー著渡辺一夫訳「パンタグリュエル物語」2003 年ワイド版岩波文庫 68 頁
18　ジャレド・ダイアモンド著倉骨彰訳「銃・病原菌・鉄下巻」2000 年草思社 76-77 頁
19　「日常性の構造 2 」92 頁

西ヨーロッパで活字を発明したのが誰であったのか，マインツのグーテンベルグであったとの一般的常識は最近の諸研究で疑問視されているが，ドイツのマインツを中心とするグーテンベルグをはじめとするシェファーやフストなど一連の人々によって発明・改良され，多くの印刷職人たちによってヨーロッパ各地に伝播したとの認識に大きな間違いはなさそうである。

「発明は世界を駆けめぐった。砲手たちが雇い主を探して回り歩いたように，印刷職人はありあわせの材料を持って当てのない旅をして回り，なにかのきっかけで住みついては，また新しい雇い主に呼び迎えられて出かけるのであった。パリで初めて本が印刷されたのは 1470 年，リヨンでは 1473 年，ポワティエでは 1479 年，ヴェネツィアでは 1470 年，ナポリでは 1471 年，ルーヴァンでは 1473 年，クラクフでは 1474 年であった。1480 年には，ヨーロッパの 110 以上の都市が，それぞれの印刷業者の印刷所によって知られていた。1480 年から 1500 年にかけて，この方式がスペインに達し，ドイツおよびイタリアで盛んになり，スカンディナヴィア諸国に入った。1500 年には，ヨーロッパの 236 の都市に工房があった。」[20]

この辺の事情については，書物の文化史研究の一翼を担うベルギーの歴史家ジャン＝フランソワ・ジルモン（Jean-francois Gilmont）が，ジャン＝ジル・モンフロワのペンネームで書いた小説「消えた印刷職人」[21] を読まれるとイメージを再現できる。

1460－1500 年のヨーロッパにおける国別の印刷工房の所在都市数を推計した他の資料によると，下表のとおりである。[22]

対象年	1460－1480	1460－1500
国名	Number of towns possessing presses	Number of towns possessing presses
Germany	22	50
Italy	49	72
Switzerland	4	8
France	8	39
Holland	8	14
Belgium	5	7
Austria-Hangary	5	10
Spain	6	24
England	4	4
Denmark	—	2
Sweden	—	3
Portugal	—	4
Montenegro	—	1
Total	111	238

「ある推計結果によると，いわゆる〈初期刊本（インキュナビュラ incunabula）〉――1500 年以前の刊本という意味である――の印刷部数は総計 2,000 万であった。当時ヨーロッパの人口はおそらく 7,000 万であった。16 世紀には勢いに弾みがついた。――パリでは 2 万 5,000 版，リヨンでは 1 万 3,000 版，ドイツでは 4 万 5,000 版，ヴェネツィアでは 1 万 5,000 版，イギリスでは 1 万版，ネーデルランドではおそらく 8,000 版である。1 版ごとに平均 1,000 部刷ったと計算すべきであるから，結局 14 万ないし 20 万版にたいして 1 億 4,000 万ないし 2 億冊の本が刊行されたことになる。ところで 16 世紀末のヨーロッパ人口は，モスクワ大公国の辺境まで含めても 1 億をほとんど出なかったのである。」[23]

その上アイゼンステイン（Elizabeth L. Eisenstein）の指摘するように，[24] 16 世紀末の西ヨーロッパの成人人口の読み書き能力が比較的発展した都市でも 50 パーセントを下まわっていたことを考慮すると，上記出版数は驚きである。

「活字文化がヘゲモニーをにぎるための必要条件の一つが，少なくとも社会の過半数が「読み書き」ができることにあるとすれば，17 世紀の最先進都市アムステルダムが 60 年代にやっと，その基準に合格するのである。」[25]

「レンハルト（J.M. Lenhart）の計算によれば，15 世紀のヨーロッパの刊本のうち，イタリアはおよそ 42 パーセント，ドイツは 30 パーセント，フランスは 16 パーセント，オランダは 8 パーセントを生産したと見られる。」[26]

宮下志朗氏はインクナブラの国別の出版点数の比率について三人の学者のデータを下記のとおり示されているが，[27] 状況はほぼ同じである。

20 「日常性の構造 2 」94 頁
21 宮下志朗訳 1996 年晶文社
22 Catalogue of books mostly from the presses of the first printers showing the progress of printing with movable metal types through the second half of the fifteenth century，1910 年，Oxford University Press, xxxi 頁
23 「日常性の構造 2 」95 頁
24 Elizabeth L. Eisenstein: The Printing Revolution in Early Modern Europe，1983 年，Cambridge University Press，30 頁
25 香内三郎「活字文化の誕生」1997 年晶文社 22 頁
26 エリク・ド・グロリエ著大塚幸男訳「書物の歴史」1997 年白水社 75 頁
27 宮下志朗「本の都市リヨン」1999 年晶文社 78 頁，R. Hirsch からの引用

	レンハルト	ビュルガー	ゴフ
イタリア	41.94%	44%	44%
ドイツ	29.52	31	31
フランス	15.52	16	14
フランドル	8.45	3.4	3.7
スペイン	?	2	2
イギリス	?	1.2	1.2

「概して，新しい技術，印刷術は，商業ブルジョワジーが最も強く最も栄えたところにどこよりも先に植えつけられたといってよい。すなわち北イタリアやオランダの商業諸都市，ライン地方や南ドイツの市の立つ諸都市，ハンザ同盟の諸都市などである。……印刷は，技術的・経済的な観点から見て，資本主義初期の典型的な産業であることがわかれば，このことは何らおどろくにあたらない。つまりこの産業は規格化と，分業と，機械化と ── 近代産業の三つの本質的な性格 ── に基礎をおいていて，大抵かなり莫大な資本を必要とするものだからである。」[28]

特にイタリアに関しては，「新しい学識の母国，キリスト教文化の中心，近代的な銀行と会計の起源の国として，ドイツ社会が依然として中世的構造のもとでその余地がほとんどなかったのに対し，冒険的な出版者や印刷業者に機会を提供した。」[29]

イタリアにおける 1501 年以前の都市別刊行数とその比率は，次のように推計されている。[30] 16 世紀半ばのイタリアの人口はおよそ 880 万人である。[31]

	No. of editions	% of total
Venice	5,000	41.32
Rome	2,000	16.53
Milan	1,200	9.92
Florence	800	6.61
Bologna	650	5.37
Naples	300	2.48
Pavia	280	2.31
Brescia	260	2.15
Others	1,610	13.31
Total	12,100	100.00

28　エリク・ド・グロリエ著大塚幸男訳「書物の歴史」1997 年文庫クセジュ 76 頁
29　S.H. Steinberg: Five Hundred Years of Printing, 1996, The British Library & Oak Knoll Press, 30 頁
30　Brian Richardson: Printing, Writers and Readers in Renaissance Italy, 1999 年, Cambridge University Press, 6 頁
31　「活字文化の誕生」54 頁

しかし，「すでに 16 世紀末には，ヨーロッパにおける書物産業の分布には多くの変化が起こっていた。ヴェネツィアを栄えさせていた商業の流れは弱まり，学芸の保護者であった豪奢な王侯や教皇たちはもはやなく，イタリアの書物は衰退する。ドイツでは，1523 年から 1525 年にかけての暴動は鎮圧され，ルターの宗教改革によって芽ばえた希望は幻滅に帰し，地方諸侯と中央の権力とのたたかいによって混乱した情勢が到来する。……ドイツの書物もまた，そういうわけで，印刷術の第一世紀におけるような重要性はもはや持たない。……フランスでは，宗教戦争によって寸断されて，出版業はもはや以前のように栄えるどころではない。とくにリヨンの印刷業は危機に見舞われて，ふたたびは復興できなくなる。この時代における書物産業の最も活発な中心はオランダであり，その最初はアントワープである。」[32] 世紀別に見ると，「主たる出版の中心は，16 世紀はヴェニス，17 世紀はアムステルダム，18 世紀はロンドン」[33] である。

このように印刷業の発展は，世界経済（ウォーラーステインのいう「近代世界システム」）の興隆，いくつかの大都市の興隆，そして何よりも権力の集中に深く結びついているのである。[34]

それでは当時出版されたのはどのような本であったのか。

「初期の活字本は，過去の文献を再び出版したものが多かったが，ルネッサンス期以降，新しい著作の数も激増していた。」[35]

「一般に読まれていたのは暦，暦書，綴字練習帳，時祷書，信仰書，それに 16 世紀末から加わる古い騎士道物語であり，行商人が梱に入れて売り歩いていたものであった。また，学院が増えてきて，16 世紀末から教科書にたいする需要が増大する。」[36]

「これら（揺籃本）のうち，もちろんのこと宗教書が全体を席捲して，約 45 パーセントを占める。ついでは，古典古代と中世ならびに同時代の文学関係の書物で 30 パーセント強にあたり，そのあとに，10 パーセント強の法律書とほぼ 10 パーセントの科学

32　「書物の歴史」83 頁
33　Peter Burke: A Social History of Knowledge, From Gutenberg to Diderot, 2002 年, Polity, 162 頁
34　同著 57 頁
35　ブリュノ・ブラセル著荒俣宏監修「本の歴史」1998 年創元社 88 頁
36　「書物の出現下」97 頁

書とが位置する。」[37]

これらの宗教書としては，聖書およびその部分訳があるが，それよりはるかに多数の部数を擁するのは典礼書籍（聖務日課書，ミサ典書，時祷書など）である。古典作家としてはキケロが最も多く，同時代の文学としてはダンテ，ボッカチオ，ペトラルカなどがある。学術書としてはドナトォスの「文法」，ヴィルデューの「大文典」，ボエティウスの「哲学の慰め」のほか「世界大鑑」「農事全書」といったものが版を重ねている。

このように印刷術出現の当初は，すでに写本の形で広く流布していた宗教書や古典の復刻が中心であったことが，第4節で取り上げる簿記書の発刊がパチョリのスンマを除きすべて16世紀以降であることの背景にある。

スタインバーグ（S.H. Steinberg）は〝Five Hundred Years of Printing″において〝Early bestsellers″[38]なる章を設けているが，そこで当時のベストセラーとして取り上げられているのは

Thomas a Kempis（ケムピス）〝De imitatione Christi″（「キリストにならいて」香内三郎氏は著者はヘラルト・フローテが正しいとしている[39]初版は1473年）[40]

エラスムスの諸著作（「格言集」「対話集」など）

ルターの諸著作（ルター訳「聖書」「贖宥と恩寵」など）

Ludovico Ariosto（アリオスト）〝Orlando furioso″（「怒れるオルランド」初版は1542年　30版）[41]

Sebastian Brant（ブラント）〝Das narrenschiff″（「阿呆船」初版は1494年）[42]などである。

それではこれらの書物は何語で書かれていたのであろうか。「書物の出現」によれば，

「インクナブラと呼ばれている1500年以前に刊行された書物全体のなかで，約77パーセントという膨大な分量がラテン語の書物によって占められている。ついで，7パーセントがイタリア語の，5ないし6パーセントがドイツ語の，4ないし5パーセントがフランス語の，また1パーセント強がフラマン語の，それぞれ書物である。」[43]

「ラテン語がこのように地位を保全できたのは，おそらくその言語としての明晰さ，正確さに由来しているに違いない。」[44]しかし「16世紀は，ラテン語が地歩を失い始めた時代である。この傾向は，特に1530年ごろから明白となる。……書籍商の顧客は少しずつ俗界の人間によって占められ，時にはそれが女性であったり商人であったりする。これらの人々の多くは，ほとんどラテン語には縁がないのであって，だからこそ宗教改革者たちは断固として近代国語を用いる。ユマニストたちも，広い範囲にわたって読者を得ようとして，これらの国語を援用することをいとわない。」[45]

「かくして印刷術は，経済上の理由から各国の国語による出版活動の興隆を招来し，その結果，最終的には各国の国語の発展とそれによるラテン語の排除という結末をもたらしたのであった。この発展のために，結局のところ文化世界が分割されてしまったのであるから，その結果ははかり知れない。」[46]

「宗教改革の生成に寄与した印刷術は，また同様に，諸国の国語の形成とその固定化においても本質的な役割をはたした。」[47]

それではこれらの読者層はどのような人々であったのであろうか。

この点に関しては死後に公証人立合いのもとで作成される遺産目録の中の個人蔵書目録が残っており，多数の研究成果が公表されている。もちろん富裕階層に属する人々に範囲は限定されるが，フランスにおける15世紀末から16世紀の377の個人蔵書についての一例をみると，「105が聖職者層の所有にかかり，内訳は，52が大司教，司教，聖堂参事会員，修道院長という高位聖職者に，35が教区付き司祭やほかの神父たちに，18が大学の教師および学生に属している。官職保有者の所有に属するものはさらに多数にのぼり，総数で126，そのうち25が高等法院評定官や最高諸法院の役人に，6つが徴税区の長や役人に，45が弁護士の，10が代訴人に，15が公証人に属している。……帯剣貴族や武士層に属するものは数が少なく，総数377のうち約30，反対に都市富裕民や商工業者が書物を，それも時としてかなり多数，所有しているのが認められる。377の個人蔵書の

37 「書物の出現下」163頁，Douglas C. Mcmurtrie: The Book-The Story of Printing & Bookmaking，1950年，Oxford university Press，320頁
38 Five Hundred Years of Printing 62頁
39 「活字文化の誕生」24頁
40 P.F. Grendler: Books and Schools in the Italian Renaissance，2002年，Ashgate，461頁
41 「本の都市リヨン」305頁
42 同著98頁
43 「書物の出現下」163頁
44 同著330頁
45 同著309頁
46 同著331頁
47 同著307頁

うち総計で66が，高級雑貨商，毛織物商，模造宝石商，皮なめし業者，香料商，リボン商，チーズ商，鍵屋，菓子屋，皮革職人，染め物職人，靴屋，運送業者などによって所有されている。」[48]

簿記書あるいは商業にかかわる実務書の読者という本章の主題に関係する考察は，既に第3章において一部検討したが，節を改めて行う必要があろう。

それでは当時の書物の値段はどれくらいであり，収入に対するウエイトはどの程度であったのであろうか。

B. Richardsonの〝Printing, Writers and Readers in Runaissance Italy〟の第5章2 'Buying printed books' からその概要を紹介しよう。

当時の書籍には価格は表示されていないから(1498年にヴェネツィアの印刷業者アルド・マヌツィオがカタログに価格を明記したのが最初である[49])，イタリアのパルマ（Parma）の大量の教科書を供給していた書籍商の1480年から90年の在庫表から推定すると，ラテン語の文法書（donato）で1ソルド（soldo）4デナリ（denari），イソップの寓話集で2ソルド，Guarinoの文法書で3ソルド2デナリであるが，1491年にはそれぞれ1ソルドに下落している。

一方1480年で一般書を見ると，ペトラッチの詩の自国語版で2リラ（lire），ボッカチオの「デカメロン」で4リラ，聖書で10リラである。16世紀初期のフェラーラ（Ferrara）では一冊の書物の平均価格は12－16ソルドと推定されている。[50]

当時の通貨システムでは，12 denari＝1 soldo，20 soldi＝1 lira，1 florinが5.5 lire（1471年）から7.5 lire（1531年）である。また1480年で妻と3人ないし4人の家族で快適な生活を送るための年収が40フローリン程度と推定されている。[51] 食・住付きの召使1人の給料がざっと年額10フロリン（200ソルド）前後，勤め人（上流市民）で年俸36フローリン（720ソルド）程度であったとの他の記述を参考にすると，[52] 通常の本は召使の月収，勤め人の月収の10分の1程度であったらしい。教科書を別とすれば書物は少なくとも現在よりは相当高価である。

極めて粗雑な推定であるが，政府高官あるいは銀行の支配人の年収が100－200フローリンであった[53]ことからの推定で，仮に年収40フローリンを現在の日本の600万円程度と仮定すると，1フローリンを5.5リラで換算して12－16ソルドの書籍は，14,000円から18,000円と高価であるが，教科書ではhornbooks（子供の学習用にアルファベット・数字・主の祈りなどを書いた紙を板にはりつけたもの）やprimersのような初学入門書で400～600円，ラテン語文法書で1,000円～3,000円程度というところであろうか。

それでも写本に比べれば5分の1から8分の1に低下しているのである。

上記年収に関して参考までにルカ・パチョリの年収を調べてみると，1500年のフィレンツェ大学との契約による教授としての年収が60フローリン，1504年のピサ大学での契約が年収80フローリン，この年の終わりには年間100フローリンでフィレンツェ大学に戻っている。[54]

いずれにしても「印刷は価格システムを作り出した。それ以前つまり均質化され反復可能な商品が登場するまで，品物の値段は買い手と売り手の交渉によってはじめて決まったものであった。本の均質性と反復可能性は，このように文字使用および産業と切っても切れない関係にある現代の市場や価格システムを作りだした。」[55]

次に経営史的視点から印刷業について若干の考察を行ってみよう。

印刷業は，その規模の問題をさしおいても，当初から印刷機や活字の購入に要する投下資本，紙の調達（この費用はつねに書物の印刷に要する支出の最大を占めていた），職人の雇用，植字工と印刷工との労働調整（リヨンにおける「大食らい団」のストライキ等印刷業における労働争議は歴史上数多く記録されている），マーケティング・リサーチの必要，取引網の組織化，決済方式の確立，かさばる商品の輸送方法，検閲など規制に関わる政治折衝など総合的な経営能力を必要とする最初の産業であった。また印刷は各種技術の総合化を必要とする。「全体として

48 「書物の出現下」188頁
49 ピーター・バーク著森田義之・柴野均訳「イタリア・ルネサンスの文化と社会」2000年岩波書店188頁
50 B. Richardson: Printing, Writers and Readers in Renaissance Italy, 1999年, Cambridge University Press, 115-117頁
51 R.A. Gpldthwaite: The Building of Renaissance Florence, 1982年, The Johns Hopkins University Press, 349頁
52 高階秀爾「ルネッサンス夜話」1981年平凡社139頁
53 The Building of Renaissance Florence　349頁
54 片岡泰彦著「イタリア簿記史論」1989年森山書店130頁
55 マーシャル・マクルーハン著森常治訳「グーテンベルグの銀河系」1986年みすず書房251頁

印刷本という業績は次のようなもろもろの発明を統合していた。紙の発明。油を基剤としたインクの発明。木彫技術と版木作製技術の発達。圧縮機とくに印刷と関連しての押し刷り技術の発達。」[56]

「こうして印刷術は，ヨーロッパにおける未曾有の経済的発展に乗じて発達する。それは早くもこの当時から一つの近代的産業であり，機械と多数の人員とを使用し，大量に生産し，はげしい競争に対抗するために原価を引き下げようとし，多額の回転資金と莫大な投資とを要求する。」[57]「のっけから利潤・供給・需要の厳格な法則に従わされた。」[58] また「商品としての書物は，街道・交通・大市とも関連があった。すなわち16世紀には，リヨンの大市とフランクフルトの大市，17世紀にはライプツィヒの大市ができた。」[59]

生産という視点に絞っても，オングの言うように「それは，ことばそのものを製造過程のなかに深く組み入れ，ことばを一種の商品 commodity にしたてた。置き換え可能な部品からなる同一の複合的な製品を，一連の組立て工程を通じて生産していく製造技術，つまり，組み立てラインの最初のものは，ストーヴでも，靴でも，兵器でもなく，印刷本を生産するラインだった。18世紀の後半に，産業革命が，この置き換え可能な部品による生産技術をほかの製品の製造にも適用したのだが，印刷業者は，3百年もまえからそうした技術を使っていたのである。ことばをものに変え，それとともに，認識活動をものに変えるのに実効をもったのは，多くの記号論的構造主義者の想定とは違い，書くことではなく，印刷だったのである。」[60]

「活版印刷の発明は，……最初の，均質にして反復可能な〈商品〉であり，最初の組み立てライン，最初の大量生産方式であった。」[61] したがって「15世紀のなかばから19世紀の初頭まで，印刷活動は商業資本に従属したままであった。主役は書籍商人であった。」[62]

「出版人の世界には，早くも15世紀から，ひと回り小型の〈フッガー〉たちがいた。リヨンのバルテルミー・ビュイエ，パリのアントワーヌ・ヴェラール，フィレンツェ出身の歴代ジウンタ家，アントン・コーバーガー，ジャン・プティ，ヴェネツィアのアルデ・マヌーチェなどの人物がいた。そして最後の例として挙げるならプランタンがいた。」[63]

香内三郎氏は職人的印刷者，商人的印刷者，人文的印刷者という表現で，グーテンベルグ，カクストン，プランタンについて解説している。[64]

「書物の出版は，既に15世紀において印刷業者を財政的に支援していた実業家の関心を引く商売そのものであった。さらに重要な点は，少なくとも現在の研究の視点から，印刷があらゆる種類の知識の商業化を促したという事実である。印刷術の発明の明白かつ重要な結果は，起業家（entrepreneurs）を，知識を広める諸過程即ち「開化ビジネス」（the business of Enlightenment）に，より密接に組み込んだことである。」[65]

これらの書籍商は，当初は平均100～300部，1480－1490年頃から400か500部，16世紀初頭で1000から1500部，16世紀後半で1250から1500部で17世紀においても部数は同じ程度発行していたと推定されている。[66]

2 ヨーロッパにおける紙の出現

印刷業にとって不可欠な原料として紙がある。羊皮紙もパピルスも印刷にはまったく不向きであったからである。フェーブルの言うように「紙が中国からアラビアを経由してヨーロッパに伝わり，その後2世紀を経て，14世紀末には広く一般に使用されていたという事実がなかったなら，印刷術の発明も無駄に終わったにちがいないのである。」[67]

紙が「新しい羊皮紙」としてイスラムの支配下にあったスペインからイタリアに伝わったのは12世紀中頃のことである。その後13世紀にはイタリア，14世紀にはフランス，15世紀にはドイツで，紙は羊皮紙に代わって日常的に使われはじめる。「イタリアでは，1269年ごろからファブリア，つづいてボローニア，チビダール，パドワ，ジェノア，トレビーゾなどで紙が作られるようになった。ファブリアで作られた紙は，スペインではじめて作られたものに比べて格段にすぐれ，けっきょくはこれが羊皮紙にとって代わったのであった。」[68] この伝播の経緯や普

56 「グーテンベルグの銀河系」232頁
57 「書物の歴史」82頁
58 「日常性の構造2」95頁
59 同著96頁
60 W.J. オング著桜井直文ほか訳「声の文化と文字の文化」2002年藤原書店244頁
61 「グーテンベルグの銀河系」192頁
62 R. シャルチェ「読書の文化史」47頁
63 「日常性の構造2」95頁
64 「活字文化の誕生」I 西洋印刷者伝説
65 A Social History of Knowledge 160頁
66 「書物の出現下」98-103頁
67 「書物の出現上」105頁
68 横尾壮英「中世大学都市への旅」1992年朝日選書158頁

及のし方は，第2章で取り上げたアラビア数字の場合とよく似ている。

紙の需要は書物に限られているわけではない。「紙は，あらゆる種類の記録の必要性の増加により13世紀以降筆記材料への需要がヨーロッパで急激に増大したとき，まさしくその西ヨーロッパで作られ始めたのである。中央政府，特に教皇政治がそれを促したのだが，すぐに教会と国家のあらゆる段階の地方組織で，また土地管理の記録のため教会や土地保有者によって追従される。勘定を記録し監査することは，王国の徴税官から小さな慈善施設まであらゆる段階で当たり前のことになった。さらに実務界では，元帳やトスカーニの本店から海外の支店の支配人に送る毎週の手紙類だけでなく，毛織物製造業者が紡績工や織工あるいは銀行家と話を交わす際の小さな紙片のメモの山まで，書かれた言葉の膨大な用途があったのである。」[69]

「13世紀末以降実業界を目指す若いイタリア人にとって，有用な情報を自分のために私的な手帳にメモしたり，年を越してそれに書き加えたり，時には後年そのコピーを作ったりすることが習慣になったとしても何ら不思議ではない。それらの手帳は，さまざまな地域の度量衡・流通通貨，特定の場所でしか見出し得ない商品，商品の質の見分け方，市の開催日，支払うべき関税額，通貨の手配，隔地間の期待できる通信頻度や手形交換などの案内書であった。……これらの手帳は，商業目的で出版された数多くの算術書とその内容が重複する。」[70]

木材から紙を製造する技術が発明されるのは19世紀になってからであり，14世紀から19世紀に至るまで，紙の主たる原料は〈ぼろ〉，すなわち古い衣類や網具類であった。

また製紙には大量の水，それも非常にきれいな水が必要である。水は動力としての製紙水車にも使われるので，製紙業の大中心地は石灰岩地帯の大きな川の上流あるいはその支流の中ほどに設置された。ただし原料のぼろを集めるには都市周辺が便利であるので，両条件を充たすジェノヴァ周辺やガルダ湖周辺，シャンパーニュ地方など特定地域に集中することになる。

「製紙業と出版業とは密接な関係にあるのであって，一方の繁栄なくして他方の繁栄はありえないのである。西ヨーロッパにおける製紙工場と印刷工房の分布を各時代について比較してみれば，このことが確認できよう。印刷術が西洋を征服していく1475年から1560年にかけて，ヨーロッパが製紙工場で覆われるのも驚くにあたらない。」[71]

羊皮紙に比べ紙は格段に安かった。「シエナの政庁は，1278－81年までは必要とする羊皮紙のために紙によるのに比べ一葉当たり7.5倍超の支払いをしなければならなかった。」[72]のである。もちろん印刷費に占める紙代の比率は非常に高かったとはいえ，紙は本の製造経費を大幅に減少させた。「羊皮紙による150ページの写本のためには，約12頭の子羊の皮革が消費された。」[73]ことを考えても明らかである。リチャードソンは紙の印刷費に占める比率をいくつかの事例で試算しているが，[74] 1484年のフローレンスの14%，1476年のモデナでの51%，1526年のローマでの37%まで時代や紙質や工房の立地場所等で相当幅があることがわかる。コスト面に加え，紙は羊皮紙に比べ運搬が容易であり，破れやすい欠点はあっても表面が滑らかである利点を有していた。

「グーテンベルグ自身は，かの有名な聖書のうち35－40部を羊皮紙で，しかし150部超を紙で印刷した。」[75]のである。

また「書物が出現した一方で，紙の需要はさまざまな分野において増大していく。教育が広まり，商取引は発展し複雑なものとなり，文書類がふえてくる。書き物以外の手仕事でも〈並の紙〉が使われるようになって，小間物商・香料商・ろうそく商などがこれを販売する。」[76]こととなる。

3　活字文化の誕生

「活版印刷文化は西欧社会における本の歴史のわずか三分の一にしかあたらない。」[77]

写本としての書物ははるか依然から存在しており，また前述したように「印刷本は，まずなによりも写本を手に入りやすく，持ち運びも容易なものにした発明品として長い間認識されてきた。」 従って15世紀末までは「印刷本の体裁を写本に似せたり，

69　Peter Spufford: Power and Profit-The Merchant in Medieval Europe，2002年，Thames & Hudson，255頁
70　The Merchant in Medieval Europe　52頁
71　「書物の出現上」129頁
72　The Merchant in Medieval Europe　256頁
73　「日常性の構造2」91頁
74　Printing, Writers and Readers in Renaissance Italy 26頁，61頁
75　The Merchant in Medieval Europe　258頁
76　Printing, Writers and Readers in Renaissance Italy 125頁
77　「グーテンベルグの銀河系」116頁

写本的手続きで売りさば」[78] かれていたのである。

しかし「ルネッサンス期の最も根本的な変化は，印刷である。しかしより正確に表現するならば，核心となる改革は印刷そのものにあるのではない。何故なら布地や皮革や紙に刻印された文字や画像は数十年前から存在していたからである。革新性は活字（movable tyoe）と印刷機にある。」[79]

写本時代の書物は数も少なく高価であり，その読者は宮廷人や豊かな聖職者に限られていた。活字文化は後述するように知識の集積・標準化とその普及において，明らかに写本文化とは質的段階を異にしている。その移行は 15 世紀後半に徐々に進行する。「16 世紀の情報産業にとって，ヴェニスはシリコン・バレーであった。」[80] という指摘には，出版人と知識人との関係を含め，当時の印刷業の社会的意義に関する深い歴史的考察が背景にある。

写本と活版印刷の違いを文化的視点から考察すると，写本時代は「黙ってページを追うといった方法は，当時，一般的なものではなかった。音読するのが普通であった。」[81] しかも一部知識人を除き一般の人々にとっての読書とは，宮廷においても庶民の家庭においても，文字の読める人が書物を朗読するのを聞くことであったのである。

「かっての認識の世界のなかで，重要な決定権をもっていたのは，視覚ではなく，むしろ聴覚だった。このことは，書くことが内面化されてからも長く変わることがなかった。西洋における手書き本の文化は，つねに声の文化をその周縁にもっていた。」[82] のである。また「16 世紀のルネッサンスは一方では二千年間続いたアルファベットと写本の時代が，他方では反復性と定量化の時代が踵を接するフロンティアであった。」[83]

しかし「印刷によって，思考と表現の世界でながく続いていた聴覚の優位は，視覚の優位にとってかわられることになった。視覚の優位は，書くこととともにすでに始まってはいたが，書くことの力だけでは十分に開花できなかったのである。」[84]

このような状況は，例えば会計を表す accounting という語が「説明する account for」から，監査を示す auditing が「聞く audit」ことから発生していることからも推察することができる。

「声によるコミュニケーションに比べいかなる種類でも書くということは，時間と空間の制約から自由なコミュニケーションを解き放ち，読者の便宜に議論を合わせる（読者は思考の流れを中断し，あるいは繰り返したり，一点に集中したりできる）ことができるのであるから，思考の節約に大いに役立った。印刷された頁は，写しとることによって書かれた記録の安全と永続性を増加し，コミュニケーションの範囲を拡大し，時間と努力を節約させた。そのようにして印刷は，急速に新しい情報交換の媒介となり，動作や目に見える現象からの抽象化のなかで，前技術的思考を先導する役割を担い，分析と孤立化の過程を押し進めた。」[85]

「これ以後言語は，書かれたものであることを第一義的性格とするようになる。」[86]

それでは活版印刷文化は思考過程，人間の生活，そして社会構造のうえにいかなる影響を及ぼしたかを概観してみよう。

個別の影響を考察する前に，印刷が知識の普及に及ぼした全般的影響について言及しておく必要があろう。「中世の封建制度は口語文化，および周辺部のない中心からのみなる自足システムに基礎をおいていた。この自足構造が，視覚的で数値的な手段によって，ナショナリズムを背景とした商業活動のシステムに翻訳されたのである。それは中心部と同時に周辺部があるシステムであり，それへの翻訳を大いに助けたのが印刷の普及であった。」[87] 商業革命の進展によって，ヨーロッパ社会は中世の分断された閉鎖的・自足的地域社会から経済活動を突破口にしだいに諸活動のネットワークが形成されてくる。ノルベルト・エリアスの思考枠組みを借用するならば，「人間の活動のネットワークが非常に複雑になり，より遠くまで拡大され，より密接に結び合わされる。ますます多くの人間集団が，したがって，ますます多くの個人が彼らの安全と必要充足に関して相互依存的になる。……それはまるで最初は何千人が，それから何百万人が，そしてその次には何千万人もの人が手と足を見えない糸でお互いに縛りあってこの世界を歩いていくようなものである。誰も彼らを先導

78 200 & 317 頁
79 E.S. Cohen & T.V. Cohen: Daily Life in Renaissance Italy，2001 年，Greenwood Press，128 頁
80 Daily Life in Renaissance Italy 129 頁
81 アルベルト・マングェル著原田範行訳「読書の歴史」2000 年柏書房 57 頁
82 「声の文化と文字の文化」245 頁
83 「グーテンベルグの銀河系」216 頁
84 同著 249 頁
85 Technics and Civilization 136 頁
86 ミシェル・フーコー著渡辺一民ほか訳「言葉と物」2001 年新潮社 64 頁
87 「グーテンベルグの銀河系」248 頁

しないし，彼らの外側には誰も立っていない。……誰一人全体の動きの舵をとることはできない。ただし，彼らの大半が，自分たち共同でつくりあげている広大な図柄を理解し，いわば，外側からそれを見ることができる場合は，この限りではない。」[88] 印刷物の普及によって当時のヨーロッパの人びとは情報（為替などの経済知識や聖書などの宗教書等々）に接し，それによって社会に参加（Engagement）し共通の概念や意識を形成するとともに，一方では，それらによって得た知識によって社会を冷静に客観的に認識する姿勢，すなわち距離化（Distanzierung）の態度を学んだに違いない。印刷は社会の「参加」と「距離化」の水準に多大な影響を与えたのである。

本章の主題に関連させて述べれば，複式簿記を中心とする会計的知識は，簿記書やマニュアル本によって実務界に普及し，一つのハビトゥスとして定着する。「ハビトゥスの産み出す実践は相互に理解可能で，諸構造に直接整合し，相互に調和したものなのであって……客観的意味，統一的でも体系的でもある意味を備えることになる。実践感覚と客観的意味との合致がもたらす根本的な効果のひとつは，常識の世界の生産にある。この世界が示す直接の自明性は，実践と世界との意味感覚に関してコンセンサスが保証する客観性によって倍化する。コンセンサスとは，すなわち，諸々の経験の間の調和であり，実践が各々，互いに似た，または同一の経験の……表現から受け取る連続的強化である。」[89]

それでは具体的側面に視点を移そう。

アイゼンステインは〝The Printing Revolution in Early Modern Europe〟の第１部において，「印刷文化の特色」（Some features of print culture）として次の項目に従い分析を行っている。[90]

広範な普及 ── アウトプットの増大とインプットの変容を吟味する

標準化による影響を考える

テクストおよび参考図書の再編集がもたらした効果 ── 合理化，体系化，資料の目録作成

データ収集の新手法 ── 誤記された写本から改善された刊本へ

印刷術の保存力に関する考察 ── 定着と累積変化

拡大と強化 ── 定型と言語社会学的分化の存続

上記アイゼンステインの分析について，ブリッグスとバーク（Asa Briggs & Peter Burke）は次のように要約しているのでそれを紹介し，詳細は省略する。

「彼女は一般的な結論を引き出すことには慎重であるが，印刷術の発明についての二つの長期的な結果を強調している。最初は，印刷が声のあるいは写本の流通の時代にはより流動的であった知識を標準化し，保存したことであり，第二は，印刷によって権威に対する批判が鼓舞され，その結果同じ問題に対する相容れない見解をさらに広く利用可能にしたことである。」[91]

ルイス・マンフォード（Lewis Mumford）もほぼ同様に総括している。

「ほぼ一撃のもとに，書物の安価で急速な生産が，知識，特に正確で抽象的な種類の知識，数学的操作や物理事象に関する知識についての古くからの階層の知識独占を打ち砕いた。これらの知識は，長い間小さな専門的集団の独占物だったのである。印刷本は，全ての知識を，例え貧しくとも読む能力のある全ての人々に利用できるものにした。そしてこの平等化の結果の一つは，知識そのものが伝説や独断的な伝統や詩的な幻想とは違って強烈な個人的関心の対象物となり，さらに印刷本という媒体によってすべての生活領域に広がり，過去・現在そして未来の無数の意識・精神がお互いに交流することを限りなく可能にしたのである。」[92]

ここでは，歴史家や書籍史家とは異なりメディア論的観点に立脚し，網羅的ではないが独自の分析を行ったマクルーハン，オングなどの著作からの引用を中心に，できるだけ本論文と関連させつつ印刷文化の持つ意味を探ってみる。

まず活版印刷文化は，先に触れたように人間のもつ聴覚･触覚型の空間を視覚型空間に移行した。「印刷は当事者同士が議論をわかちあうことで成立する対話を，いわば情報の小包み，持ち運びできる商品へと翻訳したのだった。印刷は人間のことばや認識感覚にひと捻り，もしくは偏向を与え，これをシェイクスピアは「商品」の名のもとにいろいろと吟味

88　ノルベルト・エリアス著波田節夫他訳「参加と距離化 ── 知識社会学論考」15 頁

89　ピエール･ブルデュ著今村仁司他訳「実践感覚Ｉ」2001 年みすず書房 92 頁

90　The Printing Revolution in Early Modern Europe 41-90 頁

91　A. Briggs & P. Burke: A Social History of the Media-From Gutenberg to the Internet, 2002 年, Polity, 21 頁

92　Lewis Mumford: The Myth of the Machine-Technics and Human Development, 1967 年, Harcourt, Brace & World, Inc.　285 頁

しているわけである。」[93] このようにして「ABC化された人間の精神」（ジョイス）が生まれる。

まず最初に視覚による知識・経験の均質化，細分化がある。

中世においては，第1章において既に検討したように，社会生活のたがいに異なる領域が十分に分化しておらず，多かれ少なかれ神学的色彩をもち，宗教的表象によって数珠つなぎになっているような体系を形成していた。伝統主義，宗教依存によって普遍的な規範性が存在すると同時に，個人は地域・身分という集団内的つながりに拘束されていたのである。[94] そしてその社会はジャック・ル・ゴッフの「封建制は書かれた世界ではなく，行為の世界」[95] である。しかし印刷術の発展を伴ったルネサンス期への移行とともに，西ヨーロッパは徐々に新しい〈世界モデル〉を形成していく。

以下マクルーハンとオングによって概観してみよう。

「印刷本は史上初の大量生産物であったが，それと同時にやはり最初の均質にして，反復可能な〈商品〉でもあった。……印刷文化における視覚による経験の均質化が，聴覚をはじめとする五感が織りなす感覚複合を背後に押しやった。」[96]

「正確に反復できる視覚情報があらたに生まれ，そのことによって生じた帰結の一つが近代科学である。近代科学をそれ以前のものから区分するのは，正確な観察をことばによる正確な表現と結びつけたということ，つまり，注意深く観察された複合的な事物や過程を，正確なことばで記述したということである。注意深く刷られた専門的な印刷が利用可能になったことによって，ことばによるそうした正確な記述が可能になった。……その結果として生まれたとびぬけて視覚的な認識の世界は，前代未聞のものだった。」[97]

「活字活用による経験の細分化は，それにともなって伝統的工芸をも細分化し，さまざまな社会的な仕事を専門化する応用知識を生み出した。そしてこうした経験の分断のうちに潜み，それを支えていた諸前提は，印刷物が市場を拡大するにつれてますますひとびとの受け入れるものとなった。」[98]

「印刷されたテキストは，手書き本のテクストよりも，おおむね，はるかに読みやすい。印刷されたものがはるかに読みやすいということから生じる結果は，たいへんなものである。テクストがいっそう読みやすいということは，究極的には，速読，黙読を可能にする。そして，そうした読みかたができるということは，さらに，テクストにおける著者の声と読者とのあいだに異なった関係をうちたてることになり，書くことに対しても，異なるスタイルの書きかたを要求するようになる。」[99]

このような傾向を最も典型的に推し進めたのが，第3章で取り上げた教科書というジャンルでのペトルス・ラムスである。「さまざまな研究の分野に，ラメ（ラムスのこと）によって開発された図解や分類区分を供給してゆくのが，商人気質の育成へ向かっての，最初の大きな動きだった。」[100]

しかしそのような傾向は，同時に中世の調和ある時代の終焉でもある。「頭と心の分裂，視覚優位ゆえの時空の均質化，そうしたものは〈近代〉の遺産としてわたしたちが引きうけねばならぬものなのである。」[101] 1820年代のロマン主義の代表者ヴィクトル・ユゴーが「1482年の物語」を副題とし，中世への愛を表現し，中世芸術の復活をはかった作品「ノートル・ダム・ド・パリ」の第五編で〈建築という書物〉に代わって〈印刷された書物〉について切々と語っている[102] のは，このような認識が背景にある。

「印刷術の発明は，人類史上の一大事件だった。革命の母胎とも称すべきものだった。この発明によって，人類の表現様式は根本的な変革をこうむったのである。人類の思想は在来の表現形式を一擲して，まったく新しい形式をとるようになったのだ。アダム以来人知を代表してきた象徴的な蛇は，とうとうその古い皮をぬぎ捨ててしまったのである。印刷という形で表現された思想は，未曾有の不滅性をおびるようになった。思想は伝播しやすいもの，とらえがたいもの，破壊しがたいものとなった。思想は天翔ける力を獲得したのである。建築が人知を代表していた時代には，思想は巨大な建物として表現され，一世紀，一地方を睥睨していたのだが，いまや一群の鳥と化し，東西南北の風の吹き散らすままに，大気と空間とのありとあらゆる場所を，いっぺんに占

93 「グーテンベルグの銀河系」251頁
94 アーロン・グレーヴィチ著川端香男里・栗原成朗訳「中世文化のカテゴリー」1999年岩波書店228，275頁
95 「中世文化のカテゴリー」57頁
96 「グーテンベルグの銀河系」193頁
97 「声の文化と文字の文化」261頁
98 「グーテンベルグの銀河系」411頁
99 「声の文化と文字の文化」251頁
100 「グーテンベルグの銀河系」268頁
101 清水徹「書物について」2002年岩波書店122頁
102 ユゴー著辻昶・松下和則訳「ノートル・ダム・ド・パリ中」1957年岩波文庫25～50頁

めてしまうようになった。」[103]

第二に集団との一体性から離れた個人意識の覚醒がある。

オングによれば,「印刷は，ことばの私有という新しい感覚をつくりだした。……印刷は，手書き本の文化においてふつう見られるよりも小さくて持ち運びができる本をつくりだした。このことは，心理的に見るならば,静かな片隅で一人で本を読むための，そして，その結果として，まったく声を出さずに本を読むためのお膳立てを整えたのである。手書き本と初期の印刷文化においては，本を読むということは，多くの場合，一人の人間が集団のなかで他の人びとに読んで聴かせるという社会的活動となっていた。」[104] また「書くことと印刷という技術なしには，近代の自我の私有化も近代の鋭敏な二重に反省的な自己意識も不可能なのである。」[105] その結果,「視覚的に均質な大衆はあたらしい主観的な意味での個人となったのである。……この傾向は会衆全員が教会というかたちで神と合一するという観念の強調から，個人の魂が神と合一するという観念の強調へと移行する。」[106] それまでは，一般の信者たちには聖書を読むことは原則禁止され，貴重な写本聖書は聖堂内に鎖をつけて飾られていたのであり，聖堂で聖歌を唄い，司祭の説教をみんなで聴くのが信者の役割であり，教会がすべての社会生活を支配していた。

このような個人意識の覚醒が,「当時さまざまな自学自習の方法が，印刷物をいろいろに用いることで育っていった複雑な過程」[107] の背景であり，後述するように商人が応用知識の手引きとして簿記書に限らず各種のマニュアル本を読むことによって，既に第 3 章で触れたような北ヨーロッパの商人たちがイタリアで商業実務を体得するという形での訓練がこれら書物によって一部転移可能になったものと想像される。「いかなる種類にせよ〈応用〉知識を手に入れる鍵は，複雑な諸関係を，一目瞭然な視覚的用語へと翻訳すること」[108] である。

第三は国民意識の誕生である。

「書くことは分割と疎外をひきいれる。しかし，それとともに，いっそう高次の統一をもひきいれる。」[109]「共同体的相互依存の初型をも形成したのが活版印刷である。」[110] 一つの側面は大衆・規格化文化への移行であり，他の側面は諸国の国語の形成とその固定化による集団的な国民意識の誕生である。

「印刷は,異なった場所の人びとに同一のテクストを読み，同一の映像を吟味することを可能にすることによって，知識の標準化をもたらした。」[111]

また,「1510 年までには印刷本が写本を駆逐してしまったように，自国語本が間もなくラテン語本にとって代わるのである。というのは国際的な，聖職にあるエリートたちからなるラテン語本の読者層とはくらべものにならないほど厖大な市場が，自国語本の読者層のものとして潜在していたからであった。」[112]

「印刷という熱い媒体によって,人間ははじめて自分が話している民族語を文字のかたちで〈視る〉ことが可能になったからであり，かつそうした言語が話されている地域という観点から，国民的統合や国力が頭に描かれはじめたからである。」[113]

「中央集権を推進する各国の王権が 16 世紀に出現し，あるいは強化されるうちに，この言語的な統一は押し進められた。」[114]「印刷術は言語の乱れを防ぎ，自国語の標準化をなし遂げるとともに豊かにもし，ヨーロッパの主要言語の意図的な浄化・体系化への道を開いた。」[115] しかし「この発展のために，結局のところ文化世界が分割されてしまった。」[116]

国民国家形成にあたって印刷の普及の果たした役割に言及した著作として，ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行」を忘れることはできない。アンダーソンはその要約として「新しい（国民）共同体の想像を可能にしたのは，生産システムと生産関係(資本主義)，コミュニケーション技術（印刷･出版)，そして人間の言語的多様性という宿命性のあいだの，なかば偶然の，しかし，爆発的な相互作用であった。」[117] と述べているが，先に触れたアイゼンスタインへの批判も含め詳しくは同著Ⅲ国民意識の起源をお読みいただきたい。

次に量的思考法の発展がある。

---

103 「ノートル・ダム・ド・パリ中」39 頁
104 「声の文化と文字の文化」268 頁
105 同著 352 頁
106 「グーテンベルグの銀河系」213 頁
107 同著 361 頁
108 同著 245 頁
109 「声の文化と文字の文化」363 頁
110 「グーテンベルグの銀河系」251 頁
111 A Social History of Knowledge　11 頁
112 同著　317 頁
113 「グーテンベルグの銀河系」212 頁
114 「書物の出現下」308 頁
115 The Printing Revolution in Early Modern Europe 81 頁
116 「書物の出現下」331 頁
117 B･アンダーソン著白石さや･隆訳「増補想像の共同体」2003 年 NTT 出版 82 頁

「数量化を厳密にする手段の発見へむけてたえず社会に加えられる圧力は，社会における個人主義へむけての圧力に比例する。すべての歴史家が証言しているように，印刷は個人主義的傾向を強化したのである。印刷はさらに，印刷技術それ自体にもともと内在していた数量化の手段を提供したのだった。」[118]

このような量的思考法の発展については，既に第３章においてアラビア数字の普及に関連し触れたところである。

例えば John U. Nef は，その著〝Cultural Foundations of Industrial Civilization〟[119] において ‘Towards Quantitative Precision’ なる章を設け，その辺の分析を行っている。

「16 世紀後半のヨーロッパは，現在過去のいかなる社会も経験したことのない正確な計算によって人間生活をコントロールする，この正確性に対する大きな進歩のちょうど戸口に立っていた。」[120] のであり，西欧の工業化の最初の局面における計量化と応用知識の発展がここに始まる。

しかしグレーヴィチが言うように「あらゆる進歩はつねに，また必然的に弁証法的である。」「中世の個人は，多少なりとも発達した〈疎外〉を知らぬ社会に生きていた。このゆえに中世の個人には，より発達した，より細分化されたブルジョア社会に移行する際に失われることになる以前の，社会生活の全一性と非分割性が固有にそなわっていた。」[121] その世界を失うことになる。

最後に次節以降への橋渡しとして，オングから引用する。

「言語とは本質的にテクストであるというこうした言語感覚を印刷は強化する。書かれたテクストとは違って，印刷されたテクストは，そのもっとも完全な，模範的なかたちでのテクストだからである。」[122]

4　活字文化と商人

商人と書く文化とは切っても切れない関係にある。「商人文化は書かれた文化であり，既に中世の段階でそうであった。」[123] そもそも筆者が本論を書く契機となったのは，マルコ・ポーロやパチョリの遺言書からグーテンベルグの訴訟記録までルネッサンス期のヨーロッパに関する歴史書に頻出する膨大な古文書や多数の日記や年代記の存在に示される記録への執念に対する単純な驚きである。

レーリヒはこのような商人における文書主義 (Schriftlichkeit) について「13 世紀になると商人が文書主義に移行したこと，いずれにせよ，その世紀の終わりには，以前とは全く異なった文書慣行をつくりだしたことである。その頃には，指導的商業地の名望ある商人は，書いたり読んだり，数字を書いて物事を処理することができ，キケロの古典文型ではないにしても，ラテン語を自由にこなすのが当然とされたのである。」[124] と上層市民について論じているし，清水廣一郎氏は商人一般について「構成員相互の関係は，……協定や契約のような法的関係として把握され，公証人の手で明文化されたのである。もちろん，これは上層市民の場合であって，庶民の場合には必ずしも実行に移すことはできなかったであろう。ともかく，人と人の関係を「契約」としてとらえ，明文化するという文書主義の理念は，このように家の中にまで浸透しているのであった。」[125] とされている。

15 世紀の「万能の天才」の一人，レオン・バッティスタ・アルベルティもその「家政論」で「つねにインクに汚れた手をもつこと」「あらゆること，あらゆる購入，あらゆる売却，あらゆる収入，店のあらゆる収支を書くこと，つねに手にペンを持つこと」が，商人にとって必要であるとしている。[126]

商業帳簿でさえ重要な歴史記録の役割を果たす。中世史家ラバンドの著作からその１節を紹介しよう。

「歴史の主人公らがしばしば不明確な，美しすぎるラテン語を大いに楽しんでいた間に，職人の記録家が中世の仕事を継続していた。商人がイタリア語で台帳に記入した。台帳は，小さな稼ぎの損益計算書であり，魅力的ではないが，歴史家には奇妙にも有用な資料である。それはルチェッラーイ家[127] やフィリッポ・リヌッツィ[128] のような者の手にかかると，時

118 「グーテンベルグの銀河系」268 頁
119 1958 年　Cambridge University Press
120 Cultural Foundations of Industrial Civilization 9 頁
121 「中世文化のカテゴリー」460 頁
122 「声の文化と文字の文化」267 頁
123 A Social History of Knowledge　155 頁
124 フリッツ・レーリヒ著魚住昌良・小倉欽一共訳「中世ヨーロッパ都市と市民文化」1997 年創元社 29 頁
125 清水廣一郎「中世イタリア商人の世界」1982 年　平凡社 82 頁
126 「中世イタリア商人の世界」152 頁
127 メディチ家のライバル
128 年代記作家

には都市の真の歴史書になることもある。それらは史観にも欠けておらず，ジョヴァンニ・カヴァルカンティの「歴史」とともに芸術品の域に達する。」[129]

しかし「数学・法律・言語・地理・経済を学び，ローマ古典を愛読する知的商人（もの書き商人）」[130]の場合と異なり一般の商人については，オングの言うように「商人の生活は完全に文字にもとづくものだったが，それにもかかわらず，その文字文化は日常生活に根ざしていて，ラテン語のレトリックにもとづいたものではなかった。」[131]

印刷文化に関連して一般的に述べれば,「書かれた文字の拡がりを促す最初の推進力は，大学における伸展する知的活動だけでなく，永続的な記録を必要とする拡大する政府の官僚機構と巨大化するビジネス組織の必要性であった。」[132]のである。

これは一方では，第3章および次節で述べる算術・実務書や簿記書の刊行に，他方ではマニュアル本やハンドブックの刊行という形で現れている。これらのマニュアル本やハンドブックは作法書，the three R's（読み書きそろばん）の教則本，商業や航海術についての実務書まで広範囲にわたる。

「商事に関する知識を習得することがますます印刷によって助長されることになったのはもちろんである。商人がいかにあるべきかを論じた著作が増えてくる。商業市，入船，さまざまな商品の価格の情報は,印刷物の形でさらに利用しやすくなった。1540年頃には，アントワープ市場における商品価格の目録は規則的に出版されていたし，1588年以降はフランクフルトのCalendariumあるいはMesrelationenが当市の見本市の情報を提供していた。1618年以降ではオランダの新聞が新世界からスペインへの銀の到着の詳細を含む経済情報を提供していた。……商業に関する辞典は，17世紀末以降からますます普通にみられる参考書の形態になった。」[133]

もちろん写本時代においても，このようなマニュアル本は流布されていた。例えば14世紀に「商業実務手引」（*La Pratica della Mercatura*）をあらわしたフローレンスの商人フランチェスコ・ペゴロッティ（Francesco di Balduccio Pegolotti）[134]や「良き慣習の書」（*Libro di buoni costumi*）のパオロ・ダ・チェルタルド（Paolo da Certaldo）などをあげることができる。[135]

先に第2節で13世紀末以降における商人の間での手帳(notebook)の普及について触れたが,「14世紀には一冊の標準的なテキストが写本として利用できるようになった。また私は，この教育上標準的なテキストには 'notebook' よりはむしろ 'manual' の用語が使われ，手帳の編纂者個人と区分することが普通であったであろうと信じている。この本は1420年頃フローレンスで合冊されたものであろう。1444年から1496年の日付でこの〝*Libro di Mercatantie*〟の8部を超える写本が残されており，この写本のさまざまな系統本から判断して，これらはもっと多数の写本の一部であったと思われる。この本は，初めからテキストとして,若い15世紀のビジネスマンのための標準的マニュアルとして作られたように見える。また初めから〈マニュアル〉を意図したかのように，現存する個人の手帳のどれよりも網羅的で十全である。この本は15世紀の末までに3回にわたり出版されることで，その圧倒的地位を確かなものにしている。加えて，1494年にはあのルカ・パチョリのスンマに組み込まれている。」[136]

内田日出海氏もマルコ・ポーロの「世界の実話」（邦題「東方見聞録」）に触れたあとで「別にいくつかの実践的教科書が出てはいる。14世紀にはヴェネツィアで「度量衡要覧」が編纂され，フランドル地方では「海事書」が出された。さらに「商業実務」「諸国商慣習録」などがイタリア商人に読まれている。版を重ねたペゴロッティ著の「商業実務」は実用書として重宝された。そこには各種算術計算表(複雑な利子や手形決済関係の計算用)，教会暦(復活祭など移動祝祭日を知って大市開催の日付を知る),為替相場，手形期限の慣習などが掲載されていた。」[137]としている。

またこれらと内容は異なるが，「「覚書（*ricordi*）」ないし「家族の書（*libri di famiglia*）」と呼ばれるジャンルが,とりわけ14世紀初頭以来,15世紀の30年代まで書き継がれ，フィレンツェの古文書館に，

129 E.R.ラバンド著大高順雄訳「ルネサンスのイタリア」1998年みすず書房377頁
130 「万能人とメディチ家の世紀」40頁
131 「声の文化と文字の文化」325頁
132 E.S. Hunt & J.M. Murray: A History of Business in Medieval Europe, 1200-1550, 1999年, Cambridge University Press, 198頁
133 A Social History of Knowledge　159頁
134 Armando Sapori: The Italian Merchant in the Middle Ages, 1970年, W.W. Norton & Company. Inc.,102頁
135 イリス・オリーゴ著篠田綾子訳「プラートの商人」1997年白水社62 & 106頁
136 The Merchant in Medieval Europe　53頁
137 朝倉弘教・内田日出海「ヨーロッパ経済 ── 過去からの照射」2002年頌草書房85頁

何百と残されている。これらは，……金の貸借，売買，会社設立のための投資，土地・家屋の購入，契約，税金の支払い，商売相手などの記載にくわえ，子供の誕生や家族の結婚・死亡，公職任命などをはじめとする家族のさまざまな出来事や都市の耳目をそばだたせる事件が記されている。」[138] という背景も考慮しておく必要があろう。これらの実務書は，図書館，特に私的な文書館ときには政府の文書館に見ることができるし，そのうち長編もののいくつかは，印刷にも付されている。[139]

ピーター・バークも前掲書の 'Sociologies and Histories of Knowledge' の章において，「第二の視点として，これらの知識保有者は通常言われているよりもより大きく，かつ多様なグループであった。知識人の活動同様実務的，地域的あるいは日常的な知識が現在は社会学者，特にいわゆる民族方法学派（ethnomethodological school）によって重要な視点として取り上げられている。」[140] として注意を喚起している。本論においてしばしば引用している Bourdieu はこの ethnomethodological school の一人である。

しかし商人が実務の場で利用可能なマニュアル本に関しては，「声の文化には，商売のためのハウ・トゥー・マニュアル［手引き］にあたるものがまったくない（このような手引きは，手書き文字の文化においてさえ実際にはきわめてまれであり，あってもつねに大まかなものである。実際にはそうしたものがあらわれはじめるのは，印刷の文化がかなり内面化されてからのことである。）。商売のやりかたなどは徒弟奉公で学ばれた。つまり，見習い［観察と実践］で学ばれるのであって，ことばによる説明などは最小限にしかあたえられないのである。」[141]

「楽器の演奏法から勘定の記入までのさまざまな技術をいかに習得するかをやさしい段階方式で説明する〈ハウ・トォー〉本が，新しく印刷機からなだれのように吐き出されたが，これに比肩できるようなものは写本文化にはまったく見られなかった。」[142]

「1470 年から 1599 年の間に 1,600 を超える商人用のガイドブックが印刷され，17 世紀にはその倍以上，18 世紀には商業と工業に関する数刊ものの百科事典が印刷されていることが認められる。」[143]

このようなマニュアル本やハンドブックについての記述は，他の項目に関連して一部触れられることはあっても，なかなか独立して分析・検討の対象とされることは少ない。その点 Louis B. Wright の "Middle-Class Culture in Elizabethan England" はその第 5 章を 'Handbooks to Improvement' として，15・16 世紀のイギリスにおける状況を詳述している。[144]「L.B. ライトの見事な描写によって，当時さまざまな自学自習の方法が，印刷物をいろいろに用いることで育っていった複雑な過程を知ることができる。最初の世代の読者たちが印刷本をたんなる娯楽としてではなく，応用知識を手に入れる手引きとして読んでいたことは明らかなのである。」[145]

この他では，R.S. Lopez & I.W. Raymond の "Medieval Trade in the Mediterranean World"[146] の Chapter XXI Manuals において，

Practical Arithmetic
Practical Geography
Practical Philology
Advice for Buyers
Traveling to China

という分野別にフィボナッチの「算盤の書」ほか 7 編の英語版要約を掲載している。しかしこれらはすべて写本時代のマニュアルであり，Advice for Buyers に掲載されているのは，

The Book of The Wares and Usages of Diverse Countries（1458 年）
The Practice of Commerce（1310 年と 1340 年の間，前掲 Pegolotti の「商業実務手引」）

の 2 編である。

時代的ずれは当然存在するが，イギリスの状況は他国とほぼ同じであろうから，ライトに従い当時の状況を見てみよう。

「商人は宮廷人にくらべ知識を習得する時間と手段を欠いているから，教示と事実の有用な要約を迅速に得る手段を必要とした。この要求に応えたのが，印刷されたガイドブックであった。……市民たちは，学校が教えなかったり，あるいはやりとげえなかっ

138 池上俊一「万能人とメディチ家の世紀」2000 年講談社選書メチエ 181 頁
139 The Italian Merchant in the Middle Ages 104 頁
140 A Social History of Knowledge 8 頁
141 「声の文化と文字の文化」95 頁
142 The Printing Revolution in Early Modern Europe 61 頁
143 A Social History of Knowledge 170 頁
144 Louis B. Wright: Middle-Class Culture in Elizabethan England, 1958 年, Cornell University Press, 121 頁～169 頁
145 「グーテンベルグの銀河系」361 頁
146 R.S. Lopez & I.W. Raymond: Medieval Trade in the Mediterranean World, 2001 年, Columbia University Press

たことを便利なマニュアル本を使って個人的に勉強しようとした。大半の人びとにとって，ハンドブックによる学習の時代が到来したのである。中世の努力目標が，より簡単に習得できるように全ての知識を整然とした百科事典的な形に縮減することであったのだから，要約という行為は，ルネッサンスにとって新しいことではない。しかし，印刷術の発明は百科事典的な仕事の負担を軽減し，安価なマニュアル本の出版を可能にした。さらに，相対的な識字率の向上は，それ以前に比べそのようなマニュアル本の有用性を高めることになった。」[147]

ルネッサンス期におけるマニュアル本として最も典型的なものは作法書（courtesy book）である。

イタリアでは，「そうした作法書の中でもカスティリオーネの「宮廷人」（1528 年），ジョヴァンニ・デッラ・カーサの「ガラテーオ」（1558 年），ステファノ・グァッツォの「市民の会話」などがよく知られている。この三つの著作はすべて，……日常生活において如何に自らを提示するかを教えるマニュアルであり，公の場において自らの社会的役割を優雅に演じる術についての教則本なのである。」[148]

イギリスでも上記「宮廷人」は，1561 年に〝The Courtyer〟として，「カラテーオ」は 1576 年に〝Refined Courtier〟として，「市民の会話」は 1581 年に〝Civile Conversation〟として，それぞれ翻訳・出版されている。

先に当時のベストセラーとして触れた「阿呆船」も「宗教的・道徳的教訓書の最大傑作」[149] である。

技術書についても幾何学の応用に関するものから航海術・船舶操縦術まで広範囲にわたるが，ここでは商業に範囲を限定しよう。

「例えば商人は，計算，利息表，数カ国辞書などなど有益な多数のマニュアル本を持つことになる。しかし，このような特別な使用目的のものに加えて，商人の奉公人たちが必要とする全ての実務的知識を要約しようとする本も存在した。このような一般的な商人用マニュアルで最良なものの一つは，〝The Marchants Avizo Verie Necessarie for their Sonnes and Seruants, ……〟である。作者は John Browne で，スペインとの貿易に従事していた商人である。……このテキストは，ライバルを出し抜く郵送方法，外国人に要求される思慮分別，取引の技術，礼儀と寛容の必要性，倹約と節酒の価値などさまざまな問題に対する実践的なアドバイスを用意した。」[150]

この他 17 世紀前半の代表的事例として，ライトは Lewes Roberts の〝The Merchants Mappe Of Commerce〟（1638 年），〝Warre Fare Epitomized, In A Century Of Military Observations〟（1640 年）を挙げている。[151]

「Browne's *Avizo* や Robert's *Merchants Mappe* のような包括的なマニュアルは，外国語の有用な成句，通貨制度の説明，都市間の距離など必要な情報を含んでおり，外国に関する簡潔な知識を旅行者に与える初歩的な案内書に見られるような事実を補足するものであった。」[152]

このようにして，「紳士になるための訓練法から暦の読み方までさまざまな分野のハンドブックは，エリザベス朝のイギリスにおいて庶民教育の強力な装置として確立された。……便利なハンドブックのおかげである種の情報が共有財産になった。もはや学ぶことは，書記や貴族の占有物ではなくなった。」[153]

5　15－16 世紀の簿記書

まずパチョリをはじめとする当時の簿記書の役割全般について，チャットフィールドの総括的記述を引用する。

「Pacioli は，一時代が終了せんとしている時期に彼の書物を著述している。アメリカ大陸の発見と東洋への交易路の開通によって，政治的かつ商業的主導権は地中海から北大西洋沿岸諸国へと移行した。多くの変化が同時に発生し，複式簿記の全ヨーロッパへの普及を促進したのである。民族国家の成立は，より統一的な貨幣制度の成立を促し，アラビア数字がローマ数字にとって代わり，紙の使用が普及し，Gutenburg の活版印刷の発明は印刷本を一般に入手し易いものとしたのである。数世紀間の複式簿記の発展は，新しい技術的発達よりも，むしろその使用の広範な拡大により評価されるであろう。」[154]

簿記書の読者等については第 3 章で若干検討を加えたところでもあり，ここでは手元の諸文献から 15・16 世紀に印刷に付された簿記書を列記してみる。なお出版された地名の後の括弧内は，分かる範囲で出版元と判型を示している。folio（フォリオ）

147　Medieval Trade in the Mediterranean World 121 頁
148　「イタリア・レネサンスの文化と社会」315 頁
149　「中世ヨーロッパ都市と市民文化」124 頁
150　Middle-Class Culture in Elizabethan England 160-161 頁
151　同著 162-163 頁
152　同著 163 頁
153　同著 169 頁
154　津田正晃・加藤順介訳「会計思想史」1979 年 67 頁

は大きな二つ折り判，quarto（クアルト）はより扱いやすい四つ折り判，octavo（オクタヴォ）はポケットに入る八つ折り判（小型判）である。またタイトルは当時はきわめて長い文章での書名が一般的であるため，最初の部分のみを掲載した。文献上書名に邦訳があるものは，それを示しておく。

1458 or 1463 年（1573 年出版）

コツルリ（Benedetto Cotruglio Raugeo，裁判官）

1．〝Della mercatura et del mercante perfetto Libri quattro″（「商業と完全な商人」）[155] 1602 年再版（Brescia）

ヴェニス

4 冊に分れ簿記については第一冊第十三章「商業帳簿の記入法」

1494 年

パチョーリ（Fra Luca Pacioli（1450－1509），フランシスコ会の修道士）

2．〝Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita″（「算術・幾何・比および比例総論」）

ヴェニス（Paganinus de Paganinis, folio）

1518 年

シュライバー（Heinrich Schreiber（1490－1510），大学会計代理人）

3．〝Ayn neu kunstlich Beuch welches gar gewiss und behind lernet nach der gemainen regel Detre, ……″（「新技術書」）[156]

1535，1544，1572 年など数版を重ねる

4．〝Rechenbuchlin, Kunstlich, behind vnd gewiss, auff alle Kauffmannschaft gericht″（「計算帳簿」）1523 年[157]

ニュールンベルグ（Johann Stuchs for Lucas Alantse, octavo, octavo），ヴェニス

1522 年

カスティルロ（Diego del Castillo，法律家・数学者）

5．〝Tratado de cuentas″（「勘定論」）[158]

ブルゴス（スペイン）

1525 年

タグリエンテ（Giovanni Antonio Tagliente，ヴェニス共和国の俸給生活者，数学・書道・簿記の教師）

6．〝Luminavio di arithmetica, scrittura semplice″（「算術の光」）[159]

7．〝Luminario di arithmetica, libro deppio″[160]

ヴェニス

1531 年

ゴットリーブ（Johann Gottlieb，商人階級の補佐官）

8．〝Ein Teutsch verstendig Buchhalten fur Herrn order Gesellschaftter inhalt Wellischem process & c.″（「明解ドイツ簿記」）[161] 1546，1531 年再版

ニュルンベルグ（Fridrich Peypus, quarto, quarto）

1534 年

マンツォーニ（Demonico Manzoni，簿記係）

9．〝Quaderno doppio col suo Giornale, novamente Composto, & diligentissimente, ordinate, secondo il costume di Venetia″（「商業簿記・ベニス式仕訳帳及び元帳の複式記入」）[162] 1540，1554 年再版

10．〝Libro Mercantile ordinato col svo Giornale & Alfabeto, per tenir conti doppi al mode di Venetia, ……″[163] 1564 年，1573 年再版

ヴェニス（qoarto）

1537 年

エレンボーゲン（Erhart von Ellenbogen，ダンチッヒの計算親方）

11．〝Buchhalten auff Preussiche muntze gewicht……″（「プロシアの鋳貨と重量による簿記」）[164]

ウイッテンベルグ（ドイツ）

1539 年

155 田中藤一郎「複式簿記発達史論」1961 年評論社 26 頁 E. Peragallo “Origin and Evolution of Double Entry Bookkeeping” 54 頁 D. Murray “Chapters in the History of Bookkeeping Accountancy & Commercial Arithmetic” 191 頁，小島男佐夫「会計史入門」1987 年森山書店 53 頁

156 片岡泰彦「ドイツ簿記史論」1994 年森山書店 105 頁，D. Murray 193 頁，M.B. Stillwell “The Awakening Interest in Science during the First Century of Printing 1450-1550”69 頁，「会計史入門」99 頁

157 「リトルトン会計発達史」39 頁

158 「会計史入門」177 頁

159 「複式簿記発達史論」150 頁，「会計史入門」67 頁

160 D. Murray 179 頁

161 「ドイツ簿記史論」105 頁，D. Murray 197 頁，「会計史入門」101 頁

162 「複式簿記発達史論」39 頁，E. Peragallo 60 頁，D. Murray 179 頁，「会計史入門」69 頁，片岡泰彦「イタリア簿記史論」1989 年森山書店 257 頁

163 D. Murray 180 頁

164 「会計史入門」106 頁

カルダノ(Gerolamo Cardano(1501－1576)，医師，哲学者，数学者)

12. 〝Practica arithmetica et mensurandi singularis〟(「実地算術」)[165]

ミラン（Giovanni Antonino de Castiglione, octavo）

1539 年

著者不明のパンフレット

13. 〝per che in signa atener libro doppio & far partite, eragion de Banchi, e de Mercantie, & a riportare le partite novamente Stampata〟(「複式簿記による銀行・商業の会計と報告」)[166]

ヴェニス

1543 年

オールドカースル（Hugh Oldcastle，ロンドンの呉服商，算術・簿記の教師）

14. 〝A profitable Treatyce called the Instrument or Boke to learne to knowe the good order of the kepyng of the famouse reconynge, called in Latyn, Dare and Habere, and in Englyshe, Debitor and Creditor〟(「有益なる論文」あるいは「借方貸方と呼ぶ計算記帳」)[167]

ロンドン（John Gough, quarto）

原本現存せず，最初の英語簿記書

1543 年

イムピン（Jan Xmpyn Christoffels，アントワープの呉服商人）

15. 〝Nieuwe Instructie Ende bewijs der looffelijcker Consten des Rekenboecks ende Rekeninghe te houdene Nae die Italiaensche maniere〟(「新しき手引」あるいは「イタリー式方法の勘定帳簿」)[168] Iehan Paulo de Biancy（イタリア語）の論文からの翻訳

1547 年英語版〝A notable and very excellente woorke〟(仏語版もあり)[169]

アントワープ（Gilles Copyns de Diest, quarto）

最初のオランダ語簿記書

1546 年

テクサーダ（Gaspar de Texada or de Tejada）

16. 〝Suma de arithmetica pratica y de todas mercaderias con la horden de contadores〟(「算術実務全書」── 会計の 1 章を含む)[170]

Valladolid（スペイン）（Francisco Fernandez de Cordoba, quarto）

1549 年

シュヴァイケル（Wolffgang Schweicker，簿記係）

17. 〝Zwifach Buchhalten, sampt seine Giornal/ des selben Beschlus/ auch Rechnung Zuthun & c.〟(「複式簿記，その仕訳，締切，計算」)[171]

ニュルンベルグ（Johan Petreium, folio）

1550 年

メンヘル（Valentin Mennher de Kempten，数学教師）

18. 〝Practicque brifue pour cyfrer et tenir Liures de Compte touchant le principal train de merchandise〟(「勘定帳簿の記入」)[172]

1555・1558 年リヨンで再版

1564 年バルセロナで再版

19. 〝Buechhalten durch Mich Valentin Mennher〟(「簿記」)[173] 1560 年

20. 〝Buechhalten Kurtz begriffen durch zway buecher〟(「2 帳簿による簡単な簿記」) 1563 年

21. 〝Practique des triangles spheriques〟(「球面三角形の実施」) 1564 年

22. 〝Practique pour brievment apprende a ciffer & tenir livre de comptes, avec la regle de coss, & geometrie〟(「計算・簿記学習簡易実践」) 1565 年

アントワープ（Ian Loe）

1551 年

著者不明のパンフレット

23. 〝Un Modo Novamente Ritrovato Ch'insegna tener libro doppio, secondo il consueto de tutte le provincie del mondo〟(「全国慣例によ

165 「複式簿記発達史論」45 頁，E. Peragallo　66 頁，M.B. Stillwell　48 頁，「会計史入門」68 頁

166 「会計史入門」68 頁

167 「リトルトン会計発達史」39 頁，久野秀男「英米古典簿記書の発展史的研究」1979 年学習院 121 頁，D. Murray　219 頁，Parker & Yamey "Accounting History"592-593 頁，Yamey, Edey & Thomson "Accounting in England and Scotland: 1543-1800" 202 頁，「会計史入門」211 頁

168 J.B. Geijsbeek "Ancient Double-Entry Bookkeeping" 113 頁，「会計史入門」113 頁

169 小島男佐夫「会計史資料研究」1978 年大学堂書店 3 頁，Yamey, Edey & Thomson　202 頁，「英米古典簿記書の発展史的研究」138 頁

170 「会計史入門」177 頁，D. Murray　476 頁

171 「ドイツ簿記史論」129 頁，D. Murray　201 頁，「会計史入門」107 頁

172 「複式簿記発達史」131 頁，D. Murray　207 頁，「会計史入門」129 頁

173 17～20 については，「会計史入門」129 頁

る複式簿記新教授法」)[174]

ヴェニス

1551 年

フォンターナー(Bartolomeo Fontana，タリエンテの友人)

24. 〝Ammaestramento novo che insegna a tener libro ordinariamenta ad uso di questa citta di Venetia comme etiam di tutta L'italia″(「ヴェニスやイタリアの町々の方法による順序正しき簿記法新教育」)[175]

ヴェニス

1553 年

ピール(James Peele，塩商人，教師兼事務職員)

25. 〝The Maner and forme how to kepe a perfecte Reconyng, etc.″(「完全な記録の作成方法とその様式」)[176]

26. 〝The Patheway to perfectuess in the accomptes of Debitour and Creditour″[177] 1569 年

ロンドン(Richard Grafton, Thomas Purfoote)英国人による最初の英語簿記書

1558 年

カサノーヴァ(Alvise Casanova，ヴェニス共和国財務会計官)

27. 〝Specchio Lucidissimo, nel quale si vedono essere diffinito tutti i modi, e ordini de scrittura, che si deve menare nelli negotiamenti della Mercantia″(「非常に明瞭な鏡」)[178]

ヴェニス(quarto)

1565 年

ロッカ(Antich Rocha，バルセロナ大学教授)

28. 〝Compendio y breue instruction por tener Libros de Cuenta, Deudas, y de Mercadurea″(「勘定，債務および商品の帳簿保持のための要約的な，かつ簡潔な指示」)[179](フランス語からの翻訳)

バルセロナ

1567 年

ザヴォンヌ(Pierre de Savonne，数学教師)

29. 〝Instruction et maniere de tenir les livres de compte par pariies doubles″(「複式簿記の説明および方法」)[180]

アントワープ(Plantin)

リオン(1581 年第 2 版，1588 年第 3 版，Iean DE Tovnes)

1567 年

ウェディングトン(John Weddington，アントワープ居住の商人，ロンドン市民)

30. 〝A Breffe Instruction and manner hovve to kepe Merchantes Bokes of accomptes″(「簡単な手引と方法」)[181]

アントワープ(Peter van Keerberghen, folio)

1570 年

ガムマースフェルダー(Sebastian Gamersfelder)

31. 〝Buchhalten Durch zwey Bucher nach Italianischer Art vnd weise″(「イタリア式の二帳簿による簿記」)[182]

ダンチッヒ

1576 年

ピィテルツあるいはペトリィ(Claes Pietersz(Nicolaus Petri Daventriensis)，数学・簿記の教師)

32. 〝Boeckhouwen op die Italiaensche maniere……″(「イタリア風の簿記云々」)[183]

33. 〝Practique om te Leeren Rekenen cijpheren ende Boeckhouwen……″ 1583 年(「算術と簿記の実際云々」)[184]

1596 年 W. Philip によりロンドンで英訳出版(The Pathway to Knowledge)[185]

アムステルダム

1582 年

クルート(Bartholomeus Cloot，メンヘルの弟子)

---

174 「会計史入門」68 頁

175 「会計史入門」68 頁

176 チャットフィールド「会計思想史」1978 年文真堂 71 頁，D. Murray 221 頁，Yamey, Edey & Thomson 203 頁，「英米古典簿記書の発展史的研究」150 頁，「会計史入門」213 頁

177 「複式簿記発達史論」133 頁，Yamey, Edey & Thomson 203 頁，「英米古典簿記書の発展史的研究」151 頁，「会計史入門」213 頁

178 〝Origin and Evolution of Double Entry Bookkeeping″66 頁，「会計史入門」72 頁，「イタリア簿記史論」269 頁

179 「複式簿記発達史論」134 頁，D. Murray 488 頁，「会計史入門」179 頁

180 「複式簿記発達史論」135 頁，「会計史入門」165 頁

181 「会計史資料研究」112 頁，174 頁，D. Murray 227 頁，「英米古典簿記書の発展史的研究」156 頁，「会計史入門」122 頁

182 「会計史入門」110 頁

183 「複式簿記発達史論」157 頁，「会計史入門」243 頁

184 「会計史入門」243 頁

185 「英米古典簿記書の発展史的研究」158 頁，「会計史入門」243 頁

34. "Corte Maniere ende Stijl om Boeck te houden, op de Italiaensche vvyse ende maniere"（「イタリア簿記の簡単なる方法云々」）[186]
アントワープ
Mennher の模倣といわれている
1586 年
ピエトラ（Don Angelo Pietra de Genoa，ベネディクト教団の僧侶）
35. "Indrizzo de gli economi, o sia ordinatissima"（「会計係指針」）[187]
マントヴァ
1588 年
ウエンセスラウス（Martin Wentseslaus，教師）
36. "Instrucsye op het Italiaens boukhouden"（「イタリア簿記教授」）[188]
アントワープ
1588 年
Martin Fustel（教師）
37. "L' Arithmetique Abregee, conjointe a l' unite des desnombres; ……"[189]
パリ（M. Orry）
1588 年
メリス（John Mellis，算術と簿記の教師）
38. "A Brief Instruction and maner hovv to keepe books of Accompts after the order of Debitor and Creditor, etc."[190]
ロンドン（Iohn Windet, octavo）
1590 年
メレマ（Elcius Edouardus Leon Mellema）
39. "Boeck-houden na de corste van Italien met twee partyen, als Debiteur ende Crediteur"（「イタリア簿記」）[191]
アントワープ
1590 年
ソロルザーノ（Bartolomo Salvador de Salorzano，簿記教師）
40. "Libro de Caxa y Mannual de cuentas de Mercaderes, y otras personas"（「商人および他の人々の元帳と仕訳帳」）[192]
マドリード
1592 年
レンテルゲム（Barthomeus van Renterghem，教師）
41. "Instruction Nouvellee pour tenir lelivre de compte"（「簿記新論」）[193]
アントワープ
1594 年
ゲェセンス（Passchier Goessens de Bruxelles，書道・算術・簿記の教師）
42. "Buchhalten, fein Kurz Zusammengefasst und begriffen, ……"（「簡明なイタリア式簿記」）[194]
ハンブルグ（Henrich Binder）
1596 年
ウイリヘルム（Matthias Wilhelm of Ulm，教師，会計士）
43. "Ein newes Rechenbuchlein mit vilen schonen Gesellschaften, Wachsel und ander dergleichen Kauffmans Rechnungen……"[195]
アウグスブルグ（Michael Manger, quarto）
1598 年
ヴァンデン・ダイク（Martin Vanden Dycke，教師）
44. "Clear ende cort beweijs/ om te leeren Boeckhouden nae de maniere van Italien"（「イタリア簿記の明白にして簡単なる説明」）[196]
アントワープ
1599 年
ホーレベーク（Zacharias van Hoorebeke）
45. "L' art de tenir livre de comptes ou de raison"（「会計帳簿の方法と原理」）[197]
ミィデルブルグ（オランダ）
オランダにおけるフランス語の簿記書（極めて初歩的）

以上の簿記書を国・都市別および発行年別に一覧で整理してみると，次表のようになる。これを見ても，簿記書の印刷が先に触れた経済の発展の国別・

186 「複式簿記発達史論」158 頁，「会計史入門」133 頁
187 「複式簿記発達史論」137 頁，J. B. Geijsbeek　87 頁，「会計史入門」75 頁
188 「複式簿記発達史論」158 頁
189 D. Murray　447 頁
190 D. Murray　219 頁，「英米古典簿記書の発展史的研究」126 頁，「会計史入門」230 頁
191 「複式簿記発達史論」158 頁
192 「会計史入門」180 頁
193 「複式簿記発達史論」159 頁，「会計史入門」134 頁
194 D. Murray　448 頁，「会計史入門」139 頁
195 D. Murray　202 頁
196 「複式簿記発達史論」160 頁，「会計史入門」136 頁
197 「複式簿記発達史論」160 頁，「会計史入門」137 頁

都市別・発行年別簿記書

国名	都市名	～1500	～1525	～1550	～1575	～1600
イタリア	ヴェニス	2	6，7	9，10，13	1，23，24，27	
	マントヴァ					35
	ミラン			12		
オランダ（ネーデルランド）	アムステルダム					32，33，34
	アントワープ			15，18	19，20，21，22 29，30	36，39，41，44
	ミイデルブルグ					45
フランス	パリ					37
	リヨン					29
ドイツ	ハンブルグ					42
	アウグスブルグ					43
	ニュルンベルグ		3，4	8，17		
	ダンチッヒ				31	
	ウイッテンベルグ			11		
イギリス	ロンドン			14	25，26	38
スペイン	マドリード					40
	バルセロナ				28	
	ブルゴス		5			
	?			16		

都市別推移にほぼ見合っていることが伺われる。なお表中の数字は，上記の書名に付した通し番号である。

この時期及びそれ以降の簿記書発行の統計的集計は寡聞にして筆者は知らないが，唯一 Grahame Thompson がイギリスについて 1800 年までの集計結果を示している。[198]

Number of books on accounting published in English, 1543-1800

Years	Number of books
1543-1550	2
1551-1600	8
1601-1650	11
1651-1700	49
1701-1750	92
1751-1800	175

以下の Pierre Jeannin の記述におけるマニュアル本は上記簿記書と一部重複するのかもしれないが，いずれにしても簿記史の諸文献にあらわれた上記簿記書のほかにも多数の教則本・マニュアルが存在していたと思われる。

「長い間イタリアの専売特許であった複式簿記は，16 世紀に入り他の国々の商人によって使われるようになった。複式による簿記書は，オランダ，ベルギーなどの低地地方，スペイン，ドイツでは極めて僅かしか現存していないが，しかし簿記のマニュアル本が多数残っていることが上記事実を証明している。それらの内のいくつかは，簿記理論によって形成された大きな進展を示す斬新性をあらわしており，これらのすべては，例え先行する諸著作からの単なる技術的な剽窃であるとはいえ，イタリア式会計に精通している教師によって教えられた新しい算術の教授法を反映している。このようにして，訓練された会計係の数が増加したのと同じく，公衆の関心も増大したのである。」[199]

これらの簿記書がどのような人によって読まれていたのかについては，第 3 章で言及したように判断の難しい問題である。アイゼンステインも「複式簿記の本を読んだのは，商人よりもむしろ会計学の本の著者や会計学の先生たちだったと言う人もいる。」[200] としている。またリトルトンによれば，「15

198 Grahame Thompson “Early double-entry bookkeeping and the rhetoric of accounting calculation”，A.G. Hopwood & P. Miller ed.: Accounting as Social and Institutional Practice，1994 年，Cambridge University Press，第 2 章，58 頁

199 P. Jeannin: Merchants of the 16th Century，1972 年，Happer & Row，96 頁

200 The Printing Revolution in Early Modern Europe

世紀のころといえば，……理論的説明とか理論的判断などということはまだまだ模糊とした段階にあったものらしい。簿記秘術を学び，その方法にならっていくということも理屈よりは暗誦の仕事だったらしいのである。」[201]「簿記の知識は，印刷術が用いられだしたずっと後でも一般に写則写例と口述筆記の方法によってひろまった証拠があるし，また，その当時簿記技術を商業塾(scuole)において習得すべくドイツやオランダからイタリーに赴いたものが多かったという。」[202]

しかし，リトルトン以降における印刷文化に関する最近の研究成果と複式簿記の普及を関連させて考える時，さらなる考察が必要と思われる。

この点に関し会計史家のなかでもチャットフィールドは，その著「会計思想史」(1973 年）において，「実際には，かかる時代こそ，簿記方法が洗練され普及した時期でもあったのである。この間，複式記入法の論理にはなんらの変革もなされなかったが，Pacioli の記述した簡潔な手続が実践の中でみがきをかけられていった。」[203]

「教育のための文献への Pacioli の影響をたどるのはもっと容易である。彼はベニスの実務の本質的要素を公表することにより，それ以前は主に徒弟制度や使用人の転職によって伝えられていた会計的知識を一般に普及させたのである。」[204]

「Cotrugli 及び Pacioli，そしてその後継者達は，……簿記の基礎原理を創造したのではなく，簿記知識を全ヨーロッパに流布することに貢献したのであった。」[205] と位置づけているし，さらにトンプソン（Grahame Thompson）はその論文〝Early double-entry bookkeeping and the rhetoric of accounting calculation〟[206] において，独特の視点から詳細な分析を行っている。以下トンプソンに従い若干の考察を加えてみる。

トンプソンの基本的視座は，チャットフィールド同様パチョリ以下の簿記書の著者が複式簿記の創案者でないことを認めた上で,「パチョリの著作を特徴づけるものは，彼の著作が複式簿記に関する最初のものであり，かつ印刷に付された最初のものであるという事実にある。」[207] 点に着目し，印刷術と 15 世紀におけるラムスによる教授法の改善を結びつけてその教育上（pedagogical）の意味に論及する。

「教授法の改善とともに印刷術の発明によってもたらされた変化こそ，パチョリと複式簿記の成功の中心問題である。」[208]

「例えば,さまざまな地方毎の変異をともなった会計に関する写本の多様性は，パチョリのような人々によってその一般原則と規則が印刷による開示によって理解できるように統合されたのである。」[209]

「印刷は視覚的なテキストの秩序と空間性を推進した。印刷はテキストを見出し，段落，コンパクトで引き締まった構成様式等々を伴った構成部分に分解し，より教育的な開示を要求したのである。また持ち運びのできるそのような本は，個人化，黙読，そして知識の創造を深めたのである。」[210]

スンマ以降の簿記書は第 1 章で触れたように基本的にはスンマの踏襲であるが，これらの本はすべて教育的様式によって書かれており，教科書として使われたことを意味している。またこれらの本は，基本のルールはパチョリに従っているが，さまざまな実務的な取引事例や勘定の例示が付加されている。スンマがラテン語ではなく口語体で書かれたこともその普及に貢献した。[211]

「印刷技術なしでは,複式簿記の完全な衝撃は決して実現することはなかったであろう。何故なら，複式簿記は仕訳，テキスト，数字の注意深い配置に依存しており，それは印刷された形でのみ広く伝えられ，理解されるからである。」[212]

このようにトンプソンは，複式簿記（DEB）の持つ印刷向きな性格（printery character）に注目するのである。

また上記に掲載した簿記書出版の時代は，簿記史家 Peragallo が教本より実務が優っていた時代として分類した第 1 段階（1458 年から 1558 年まで）と，簿記に関する理論的研究が開始され始めた第 2 段階（1559 年から 1795 年まで）の端緒にあたる[213] こと

33 頁
201 リトルトン著片野一郎訳「会計発達史」1978 年同文館出版 87 頁
202 同著 116 頁
203 チャットフィールド「会計思想史」65 頁
204 同著 61 頁
205 同著 66 頁
206 A.G. Hopwood & P. Miller ed.: Accounting as Social and Institutional Practice，1994 年，Cambridge University Press，第 2 章
207 Accounting as Social and Institutional practice 56 頁
208 同著 55 頁
209 同著 58 頁
210 同著 55 頁
211 同著 56 頁
212 同著 59 頁
213 Origin and Evolution of Double Entry Bookkeeping 54 頁

を考慮すべきであろう。

少なくとも，商人，簿記係もしくは教師たちが著述したこれらの簿記書によって「スンマ」の「イタリア式簿記法」(Italian Method)，特に「ヴェニス式簿記法」(Method of Venice) が最も実用的で便利なものとして，経済の発展に連れ添う形でヨーロッパ各地に伝播し，職場でのオン・ザ・ジョッブ・トレーニングや特定の先生の足もとに座っていなくとも，ひとりで手早く専門的知識を獲得することが出来る状況を生み出したことは間違いないであろう。

「徐々にではあるが，これらの簿記書は複式簿記という未完成の会計行為に未だ慣れ親しんでいなかった商人たちに刺激を与えはじめるようになった。」[214]

このように印刷された多数の簿記書によって，先に触れた「訓練の転移」，「経験の共有化」が可能になったのである。各種マニュアル本の出版も，同様の効果をもたらしたものと思われる。

6　簿記書の書誌

Pacioli の〝Summa〟(1494 年) から 1600 年までの簿記書を会計史の諸著作から抽出・列挙すると，先に示したとおり著者不明のものを除きその著者は 34 名に及ぶが，それらの著書の一部について前述の書誌的観点から若干の検討を試みてみよう。

Pacioli の〝Summa〟は 1494 年 11 月 Venice で出版されたが，出版元は Paganino de Paganini[215] である。当時の Venice は既に印刷術の発祥の地マインツを越してヨーロッパ最大の印刷都市であり，1495－1497 年の時期に印刷された 1821 点の書物のうち四分の一に当たる 447 点がここで出版されている。[216]「15 世紀後半，ヴェネツィアは印刷出版の最大の中心地となり，その出版物は印刷の鮮明，紙質の良さ，字体の美しさで好評を博している。この世紀の終わりにはヴェネツィアだけで 2835 点の書物が刊行されているが，その大部分はアルド・マヌーツィオの手によって出版された。」[217]

214　Accounting as Social and Institutional Practice　56 頁

215　M.B. Stillwell: The Awakening Interest in Science during the First Century of Printing 1450-1550，1970 年，The Bibliographical Society of America，60 頁

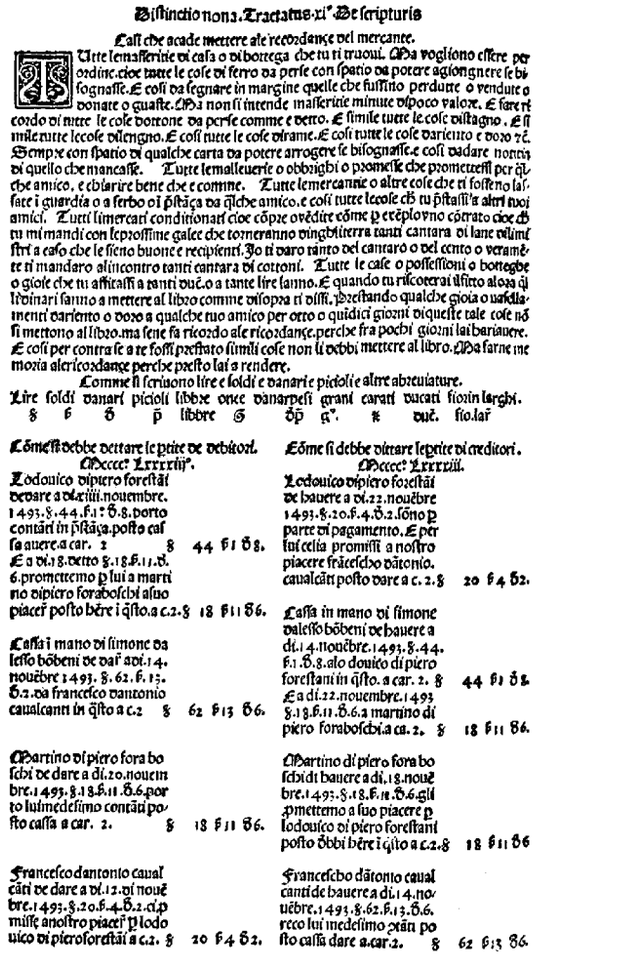
216　フェーブル&マルタン「書物の出現上」1998 年ちくま学芸文庫 40 頁

217　モンタネッリ，ジェルヴァーゾ著藤沢道郎訳「ルネサンスの歴史上」1981 年中央公論社 194 頁

スンマは当時のページ数の表記（紙 1 枚ごとに 1 カルタ）によれば 300 ページ，現代風に表記すれば 600 ページの大著であり，〈ローマン体〉の loose metal type により，インクは植物染料インクが使われている。紙は手製の rag paper（ぼろきれから作った紙）である。[218]

J.B. Geijsbeek 〝Ancient Double-Entry Bookkeeping〟から「スンマ」の簿記部分の最終頁を次頁に引用しておく。頁の上部三分の一は「商人の備忘帳に記入すべき事項」を説明しており，残りの三分の二は「元帳の記入法の一例」を示している。上記のように〈ローマン体〉のイタリア語（トスカーナ語）であり，年号以外の数字はアラビア数字で記入されていることに注意して欲しい。

ボネート・ロカッテリ，トルティ，シモーネ・ベヴィラックァ，ジョヴァンニ・タックィーノ，アン


Distinctio nona. Tractatus xi. De scripturis

Casi che acade mettere ale recordanze del mercante.

Tutte le masseritie di casa o di bottega che tu ti truoui. Ma vogliono essere per ordine. cioe tutte le cose di ferro da perse con spatio da potere agiongnere se bisognasse. E cosi da segnare in margine quelle che fussino perdute o vendute o donate o guaste. Ma non si intende masseritie minute di poco valore. E fare ricordo di tutte le cose bottone da perse comme e detto. E simile tutte le cose di stagno. E simile tutte le cose di legno. E cosi tutte le cose di rame. E cosi tutte le cose di cuoio e doro &c. Sempre con spatio di qualche carta da potere arrogere se bisognasse. e cosi da dare notitia di quello che mancasse. Tutte le malleuerie o obbrighi o promesse che prometessi per qlche amico, e chiarire bene che e comme. Tutte le mercantie o altre cose che ti fossero lasciate i guardia o a ferbo o pstaça da qlche amico. e cosi tutte le cose che tu pstassi a altri tuoi amici. Tutti li mercati conditionati cioe cõpre o vẽdite cõme p erẽplo vno cõtrato cioe che tu mi mandi con le prossime galee che torneranno vingbiterra tanti cantara di lane di limistri a caso che le sieno buone e recipienti. Io ti daro tanto del cantaro o del cento o veramẽte ti mandaro alincontro tanti cantara di cotoni. Tutte le case o possessioni o botteghe o gioie che tu affittassi a tanti duc. o a tante lire lanno. E quando tu riscoterai ãsito a loro qlli ordinari sanno a mettere al libro comme disopra ti dissi. Prestando qualche gioia o vasellamenti darsento o doro a qualche tuo amico per otto o quindici giorni di queste tale cose nõ si mettono al libro. ma sene fa ricordo ale ricordançe. perche fra pochi giorni lai bariauere. E cosi per contra se a te fossi prestato simili cose non li debbi mettere al libro. Ma farne memoria ale ricordange perche presto lai a rendere.

Comme si scriuono lire e soldi e danari e picioli e altre abreuiature.

Lire soldi danari picioli libbre once danarpesi grani carati ducati fiorin larghi.
ß　ß　d　p　libbre　℥　dp　gr.　k　duc.　fio.lar

Cõme si debbe dittare le ptite de debitori. MCCCC. LXXXXIIJ.

Lodouico di piero forestãi de dare a dì xiiii. nouembre. 1493. ß. 44. ß. 1° d. 8. porto contãti in pstãça. posto cassa auere. a car. 2　ß　44 ß 1 d 8.
E a dì. 18. detto ß. 18. ß. 11. d. 6. prometemo p lui a martino di piero foraboschi a suo piacer posto bẽre i qsto. a c. 2. ß　18 ß 11 d 6.

Cassa i mano di simone da lesso bõbeni de dar adì. 14. nouẽbre 1493. ß. 62. ß. 13. d. 2. da francesco dantonio caualcanti in qsto a c. 2　ß　62 ß 13 d 6.

Martino di piero foraboschi de dare a dì. 20. nouembre. 1493. ß. 18. ß. 11. d. 6. porto luimedesimo contãti posto cassa a car. 2.　ß　18 ß 11 d 6.

Francesco dantonio caualcãti de dare a dì. 12. di nouẽbre. 1493. ß. 20. ß. 4. d. 2. ci. p misse a nostro piacer p lodouico di piero forestãi a c. 2. ß　20 ß 4 d 2.

Cõme si debbe dittare le ptite di creditori. MCCCC. LXXXXIII.

Lodouico di piero forestãi de hauere a dì. 22. nouẽbre 1493. ß. 20. ß. 4. d. 2. lõno p parte di pagamento. E per lui celia promissi a nostro piacere frãcesco dãtonio. caualcãti posto dare a c. 2. ß　20 ß 4 d 2.

Cassa in mano di simone valesso bõbeni de hauere a dì. 14. nouẽbre. 1493. ß. 44. ß. 1. d. 8. alo douico di piero forestani in qsto. a car. 2. ß　44 ß 1 d 8.
E a dì. 22. nouembre. 1493 ß. 18. ß. 11. d. 6. a martino di piero foraboschi. a ca. 2.　ß　18 ß 11 d 6.

Martino di piero forabosch di hauere a dì. 18. nouẽbre. 1493. ß. 18. ß. 11. d. 6. gli p metteremo a suo piacere p lodouico di piero forestani posto dẽbbi bẽre i qsto a c. 2. ß　18 ß 11 d 6

Francesco dãtonio caualcanti de hauere a dì. 14. nouẽbre. 1493. ß. 62. ß. 13. d. 6. reco lui medesimo qtãi posto cassa dare a car. 2.　ß　62 ß 13 d 6.

218　J.B. Geijsbeek “Ancient double-entry bookkeeping” 1974 Scholars Book Co.17 頁

ドレア・トッレザーニ，アルド，フィリッポ・ピンチョ，ゲレゴーリ兄弟などの大印刷業者が活躍していた時代であり，R.E. Taylorもいうように Paganino de Paganiniはこれらの大印刷業者ほど有名ではない。Taylorは，1483年から1486年までPaganinoのパートナーであったGiogio Arrivabeneの同族がUrbinoの司教でPacioliが〝Summa〟について相談していた先なので，その司教がPaganinoで印刷するよう勧めたのではないかと推定している。Pacioliは末尾でPaganinoの印刷所で日夜印刷の仕事に加わり，その校正に携わったことを述懐している。このPaganiniは，1509年にもPacioliの〝*De divina proportione*〟（神聖比例論）を出版している。[219]

それでは〝Summa〟は誰の負担で出版したのであろうか。前述したように当時の一般的な形態はパトロンの財政的支援のもとで著者の全額負担で出版するのが通常であり，〝Summa〟の場合も数学教授で貴族でもあるMarco Sanutoが出版に必要な資金を供給している。[220]

Pacioliも〝Summa〟巻頭の献辞で「この本は後援者としてのあなたがいなかったならば日の目を見ることがなかったし，これからもあなたの後ろ楯（patronage）を求めたい」など長文の謝辞を述べている。[221]

Antonio Pinの次の言葉は，揺籃期の出版事情を考えるとき〝Summa〟の書誌学的特異性をよく表している。

「スンマ出版の重要性を評価するには，印刷術の発明後50年も経っていない当時において，生存する人物が印刷された自分の作品を目にすること，特にほとんど聖書に匹敵するような長さ，今日の通常のテキストの1,500頁に相当する600余頁の本文と欄外の多くの幾何図表を含む大著を目にするのは例外的であることを考慮する必要がある。」[222]

同著は第1章でもふれたように1504年にTuscanyで〝La Scula Perfetta Dei Mercanti〟（商人のための完全な教育）として〝Summa〟の簿記部分の復刻版が，さらに1523年トスコラーノで〝Summa〟初版と同じPaganinoによる出版がなされている。この第2版は需要があったらしく出版元のPaganinoが金主となっている。[223]これも第1章でふれたように1494年の初版本は99冊，1523年の第2版は36冊現存している。[224]わが国では故平井泰太郎博士と日本大学商学部図書館が初版本を保有しているほか，2版本は平井博士のほか西川孝治朗博士，関西学院大学図書館，大阪学院大学図書館等にも保有されているそうである。[225]

なお〝Summa〟はヴェニス政府から10年間の著作権を認められているが，ちょうど10年後に簿記部分の復刻版が出たこととは，出版の地がTascanyとヴェニス以外であるのでこれとは無関係と思われる。[226]

また〝Summa〟初版本には現存するもののうちにいろいろと異なった版（小島男佐夫氏によれば四つの異版）がみられるが，小島男佐夫氏は当時は同一版で沢山は印刷できず，度々版の組み換えが行われたのであろうと推定している。[227]

当時Summaがどのような人たちによって所有されていたかは知るよしもないが，小島男佐夫氏がパチョリの生誕地サン・セポルクロの市立図書館で閲覧したSummaについて，「恐らくこの地の貴族の所持したものではなかっただろうか。表紙の楯形の模様も，所持者であった貴族の家紋ではなかろうか。この「ズンマ」が果たしてパチョーリの遺言書[228]で市に教会に寄贈した5冊の内のものか如何かはわからない。」[229]とされている。

それではSummaの値段はどのくらいであったのであろうか。前述したように当時の書籍には値段の表示はなく，かつ製本済か未製本か，羊皮紙か紙か，装飾本か否かによって値段は相当違ったに違いない。Summaの市販価格を推定する資料は筆者の知る限り現存しないが，Taylorが〝NO ROYAL ROAD〟で1484－85年のヴェニスの書籍商の資料から当時の書籍の値段を例示している。[230]

Poggio's Facetiae 9 soldi　(12,000円)
Morgante 1 lira 10 soldi　(14,000円)
Landi della Madonna 10 soldi　(14,000円)

219 Printing, Writers and Readers in Renaissance Italy 135頁
220 R.E. Tailor "No Royal Road" 1942 The University of North Carolina Press　187頁
221 No Royal Road　188頁
222 M. Shubik ed."Proceedings of The Conference Accounting and Economics" 1995 Garland Publishing, Inc.165頁
223 本田耕一訳「パチョリ簿記論」1975年現代書房194頁
224 R.G. Brown, K.S. Johnston "Paciolo on Accounting" 1963年 Mcgraw-Hill Book Company, Inc.113頁
225 小島男佐夫「会計史資料研究」1978年大学堂書店51頁
226 No Royal Road　62頁
227 「会計史資料研究」52頁
228 田中藤一郎「複式簿記発展史論」に全文が掲載されている。
229 「会計史資料研究」49頁
230 NO ROYAL ROAD　199頁

Altobello 15 soldi （20,000円）
a cookery book by Platina 14 soldi （19,000円）
Dante and Commentary 1 ducat （169,000円）
Petrarch and Commentary 3 lire （82,000円）
Lucretius (classic) 15 soldi （20,000円）
Thucydides (classic) 1 lira 9 soldi （40,000円）
Ptolemy with figures 3 ducats 4 lire 18 soldi （640,000円）
a little Suetonius 4 soldi （5,500円）
a little Martial 14 soldi （19,000円）

右端に示した円表示は，仮に第1節で仮定した換算によった場合の金額である。

Summa が Folio 版で 600 頁に及ぶ大著であることを考えると，少なくとも現在の価額のイメージで言えば，10万円を下ることはなかったのではないか。

なおフィリップ・ホファー（Philip Hofer）によるパチョリの著作一覧は下記のとおりである。[231]

Suma de Arithmetica Geometria Proportione & Proportionalita 1494年 Venice
Summa de Arithmetica Geometria. Proportioni: et Proportionalita 1523年 Toscolano
Divina Proportione Opera A Tutti Glingegni Perspicaci E Curiosi Necessaria Ove Ciascun Studioso Di Philosophia 1509年 Venice
Euclidis Megarensis Philosophi Acutissimi Mathematicorumq Omnium Sine Controversia Principis Opa A Campano Interprete Fidissimo Tralata 1509年 Venice
La Scuola Perfetta Dei Mercanti 1514年 Venice

これに対し1567年にアントワープで出版された Savonne の〝Instruction et maniere de tenir les livre de compte par pariies doubles〟（フランス人による初めての簿記書）の場合は，出版元は有名な Christophle Plantin であり，すでに印刷業界の経済的基盤も確立した時期でもあるので，出版元の負担でかつ著者に謝礼が支払われたらしい。M. Rooses〝Christophe Plantin〟からの引用として，「書物の出現上」398頁に「ピエール・ド・サヴォーヌは，1567年に『会計簿記法入門』に対して自著100部と45フロリンを受け取っている」との記述がある。[232] しかし前段では「プランタンから書物を公刊した著者のほとんどがいかなる報酬も受取っていないのは，驚くべきことだ。プランタンが著者に数冊の書物を贈り物にさることが，たまにはあった。……また，こういう例はやはりどちらかというと稀なのだが，プランタンは著者たちに，著書何部かのほか何がしかの金銭を贈ることを承知している。」として前記の例を示してことからも，同著がリヨンの定期市決済を念頭におき，それに即した簿記論であったこともあり，出版者にとっては充分採算の取れそうな出版だったのであろう。

プランタンついては印刷に関するさまざまな著作において必ずといってもいいほど触れられている大書籍商･出版業者であり，彼の工房では24台の印刷機を所有し，100人以上の働き手が労働し，倉庫や取引先をヨーロッパのあらゆる町々に持っていた。[233]

またプランタンの会計帳簿については，小島男佐夫氏の論文「16世紀印刷・出版業組合の会計帳簿―クリトファ･プランタン」（小島男佐夫編著「簿記史研究」）に詳しい。

なお Savonne の著書は1581年にリヨンで Iean de Tovrnes により，さらには1605年にはジュネー

231 P. Hofer: Bibliographical Notes on the Works of Luca De Pacioli, Stanley Morison: Pacioli's Classic Roman Alphabet, 1994年，Dover Publications, Inc. 91頁以降

232 同一の記述は前記「会計史資料研究」（99頁）にもあるが，こちらは Colin Clair "Christopher Plantin"からの引用とされている。

233 「書物の出現上」321頁

ヴでも再版されているほか1614年までに三つの版がでているが,[234] 著作権の確立していない当時その後の他国での再版はどのようになっていたのかは残念ながら資料からは推測できない。多分著者には名声以外のメリットはなかったと思われる。

なお同著は，アントワープの船主であり商人であるGilles Hooftmanへの献辞を含んでおり，当然著者に渡された100部の一部はHooftmanへ献納されたのであろう。なお2版はリヨンの商人クロード・ピジョン閣下に対する献辞で始まっている。

234 「簿記史研究」139頁